

希臘羅馬諸神傳 卷第三

249  
65

# 希臘羅馬諸神傳卷第三

## 天關劣位の諸神

### 陪從の諸神

染僮 Ἔρως, Eros, Amor, Cupido, Cupid

染女の陪從諸神一にして足らずと雖も眞に神として尊崇せられし

は獨り染僮のみ熱心希願及婚頌はたゞ愛の女神より流出する化身

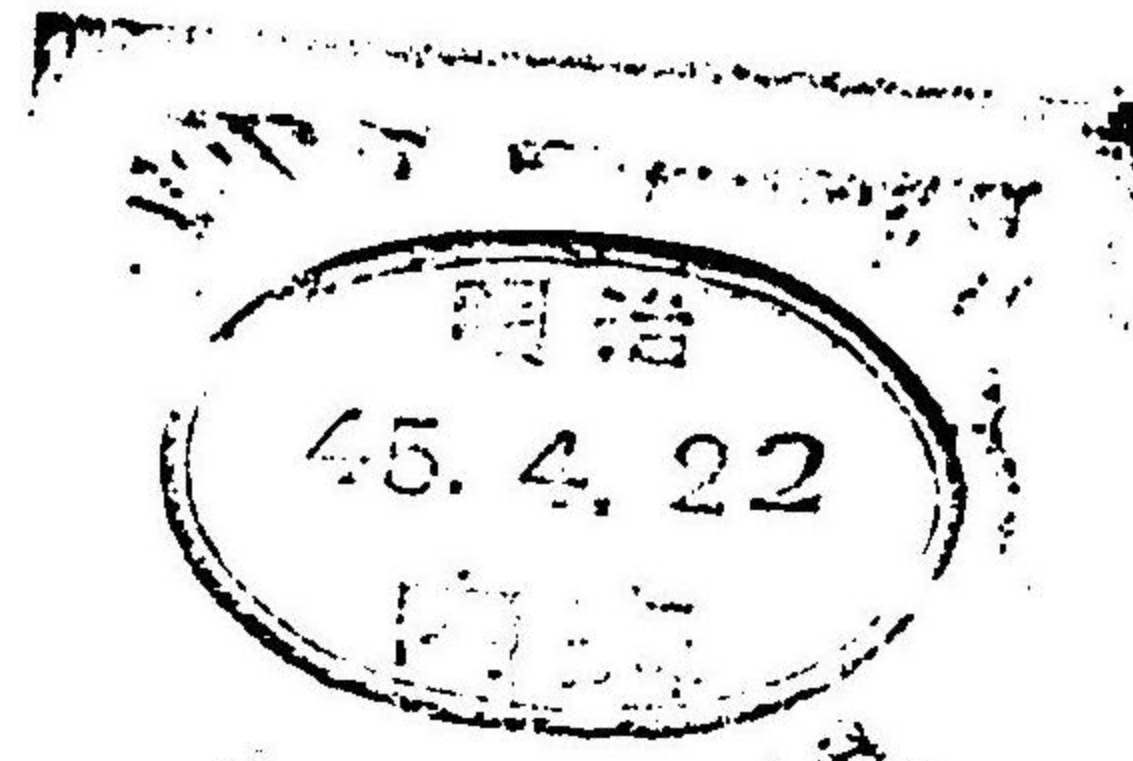
の寓意上形相に過ぎず。染僮は染女と軍神との子なり。或は曰く虹霓

と西風 Ζεφύρος, Zephyrus, Favonius との子なり。詩家は皆極美の少年としてこれを描

寫す。常に黄金の弓を持ちて、祕密の靈境より染愛の矢を放ち、これに

中る者をして必ず染心の幽微なる痛楚を起さしむ。その創痕の効果

は一種靈妙なる歡情にして、而も次第に衰滅するものなり。天父と雖



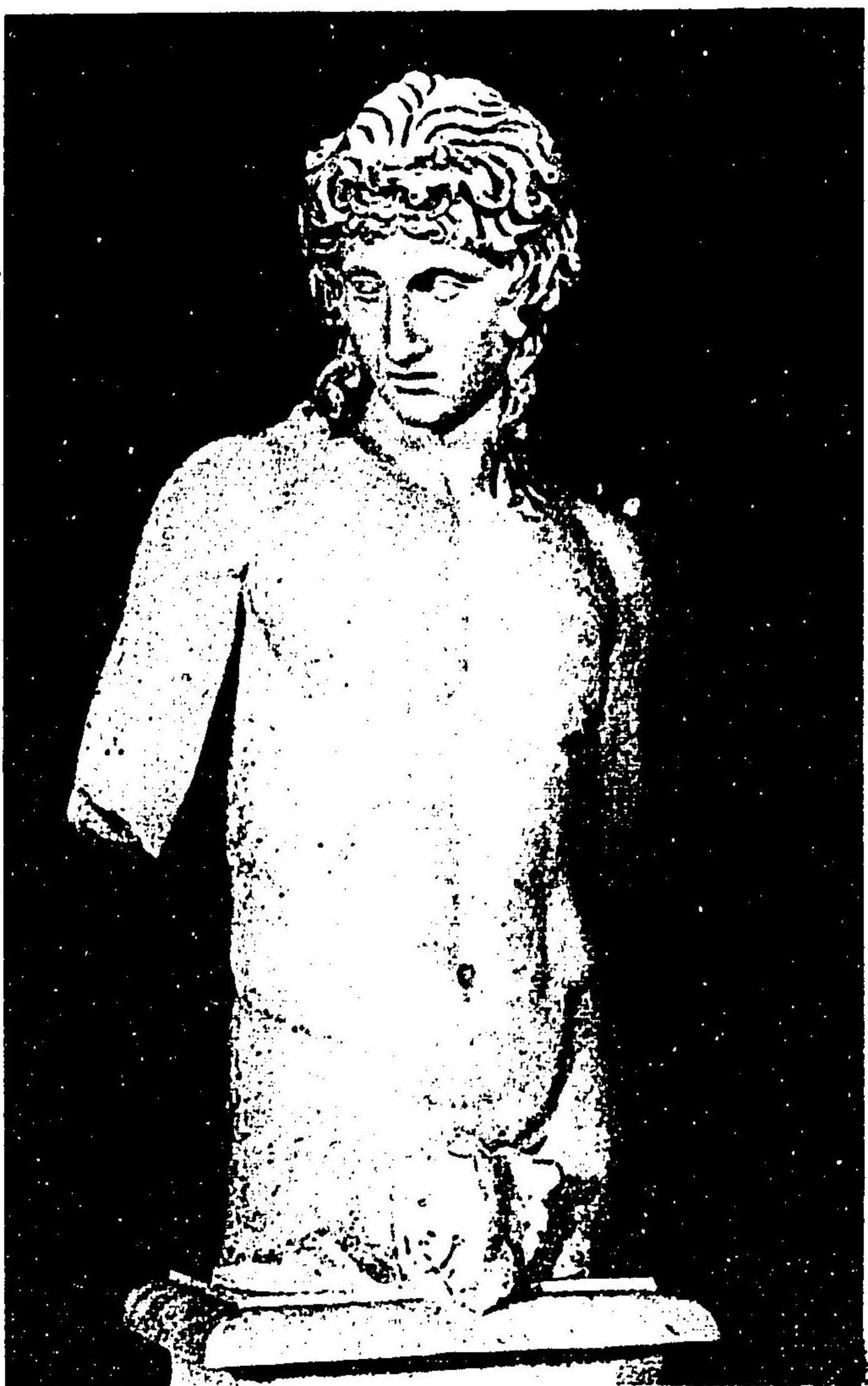
もこの靈矢の効果を免るゝ、ここ能はずと云ふ。蓋し染愛の有情中界最も恐るべき強大なる勢力たることを表するに外ならざるなり。染愛の對象にして若しこれに應ぜざる時は、希望全く絶えて情緒索然たることを免れず。こゝに於いて詩家の想像は又染女の一子として應染を立て、以て染僮の同胞と爲し、伴侶と爲せり。神傳に曰へらく、  
染女は釋小なる染僮の増盛長育せざるべきを慮り、法律の勸めに由り、その遊侶として應染を生みてこれに與へたり。これより後染僮は常にその同胞と共に嬉戯して相樂み、その去るや則ち悲むと云ふ。染愛に應ずるには反應と相應とあり。されば應染に亦この兩面の性を具ふ。一は相應情、一は反應情の擬人なり。故に又應染を以て他の我の情に應ぜざるに對する反抗又は復讐の心の人化と爲す。  
染僮は啻に男女兩性間の染愛を挑發する神として尊ばれしのみならず、又成人と兒童との愛情及凡べての友情は、この神の掌ざる所なりと想はれ、龍陽の歡の如きも、亦染僮の一屬性に皈せられたり。この最後のものは固より道義に戻れりと雖も、深交の友情又は激勵競争の効あるを以て、往々希臘青年の間に行はれき。故に染僮の像は常に使神及ヘラクレスの像と共に演武場 Gymnasia に置かる。スパルタ人は戦争に先だちて贊をこの神に獻じ、戦争中同人と與に共に平安ならむことを祈り、又危難に臨みて互に來り援けむことを誓へり。  
染僮は羅馬人の爲にアモオル又はキューピドと名づけられき。されどたゞ全く希臘神傳の摸倣に過ぎずして、敢へて公共の尊重をば享けざりき。

染僮の靈魂 Psyche を愛したる話説は、亦染愛の寓意に出で、靈魂はその名の如く人間精神の象徴なり。而してこの話説は、藝術の製作上頗

る行はれたる題目なりきと雖も、比較上後代に起れるものこそす。靈魂  
は蝴蝶の翼ある婉柔可憐の少女にして、或は染僮の爲に翻弄し叱責  
せられて悲泣伸吟し、或はその愛撫に身を委ねて、恍惚として歡喜に  
堪へざるものなりと云ふ。

藝術家は詩人に次いで好みて染僮を作り、亦少年としてこれを寫せ  
り、有名なる彫塑家ブラクシテレスの作れる染僮は、古代の最佳作  
の一として推重せられしが、ネロ帝紀元後五十四年の爲に羅馬に  
致され、チツスTitus, A. D. 八十一年の代に烏有に販せり。後代に至りてこの  
染愛の神は更に幼きものこそ爲り、常に小童として表出せらる。これそ  
の詩人の爲に悪作劇のこの神の性格に販せられたるに由るもの  
にして、その宛も小童の齡に適するを以てなり。

染僮の像は今に傳存するもの甚だ多し、中に就いて「ワチカン」の零像



像零僮染のンカチワ 圖八十四第

第四十圖をその尤もす。兩脚及兩手の臂以下缺けたりと雖も、その面相の  
美なること、これに及ぶもの少し。カピトオルの弓を試みる染僮第四十圖  
及伯林聚珍館の骰子もて戯る、像も、亦頗る著名なり。カピトオルに



第九十四圖 カピタの染像

は又染像の靈魂と相抱きて接吻せる像第十圖あり。小亞細亞地方より發掘したる陶像にも亦これに似たる懷抱像あるを見き。ナポリ聚珍



第十五圖 カピタの染像及靈魂像

館の一浮彫には、染像の應染と勝利の標幟たる棕梠葉を争へる圖を現はし、ボムペイCasa del Vesuvioの壁畫第五十圖には、多數の染像及靈魂等遊戯の圖あり。近世の畫家は好みて染像と共に染像を畫く。今ギド、レニイGuido Reni

1575.の染女、染像圖第五十圖及ラファエル、メンダスRaphael Mengsの染像圖第五十圖



圖 僮染女染作イニレドギ 圖二十五第

たり。その持物は弓と矢  
ごにして、或はこれに加  
ふるに松明の燃ゆるも  
のを以てす。藝術品中間  
にその松明を倒にせる  
ものあるは、即ち死の象  
徴なり。薔薇は特にこの  
神の爲に靈物にして、往  
往これを以てその花冠  
ご爲せるを見る。

染僮ご共に染女の陪從  
のニロオス一神たる婚頌は、結婚

を擧げて、以てその一二の例を示す。

古代の藝術上遺物に就いてこれを觀るに、エロオス染僮は皆有翼の身に現じ



圖 壁のイペム\* 圖一十五第



圖像染作スゲンメルエフラ 圖三十五第

の歡喜を表したる擬人にして、専ら後代の詩人及藝術家の所立に係る。この神も亦美少年として貌せられ、エロオス染僮の如く亦羽翼あれども、そ

の身長は年齢と共にコロオス染僮に超え、而も一層嚴格の容貌に表出せらるゝを常とす。その缺くべからざる持物は、婚儀の松明なり。英國聚珍館にヒメケン婚頌の一零像を存す。

藝文女天 Melpomene, Muses

巨人等皆滅び、神界の戦亂夷ぎて後、天部の諸神は永くこの大功業を歌頌する所の者を造らむことをメネモス天父を請ふ。こゝに於いてメネモス天父は記憶と交はりて、九人の藝文女天を生ましむ。この女天等は、九重の雲深きオリュムポスに於ける神王天父の宮中に團欒し、日光の彈琴に伴ひて、微妙の諧調もて、過去現在及未來の諸事を歌ひ、以て天神の心を悦ばしむ。これ詩家ピンドロスの叙述せる話説なり。その神性は、頗る印度の天女 Amras に肖たり。その由り來る所の自然を考ふるに、藝文女

天はもと涌泉の神婢なりしこと、殆ど疑なきもの、如し。所以者何と云ふに、**藝文女天**の尊崇は、初めビエリヤに起りしものなるが、この地はマケドニヤに於けるオリュムポス山東面の斜地にして、その嵯峨嶙峋の間より、いと美しき潺湲たる溪流は平原に瀉ぎ下り、その自然の聲響は、古の人をして直ちに音楽の女神あること想像するに至らしめしなり。かくてこの女天等の本地は、オリュムポスの斜地よりポイオチヤのヘリコン山 Helicon 及バルナツソス山に移り、女天等は常にこゝに住むこと、信ぜられき。殊にバルナツソス山の麓より出づるカスターリヤ Cassia の涌泉は、女天の爲に神聖なる處なりき。古瓶の圖畫には、往々樂器を持てる**藝文女天**あるを見る。雖も、元來たゞ唱歌の女神にして、上代に在りては一の**歌者群 orchestra** たり。各女天の唱歌、音楽の諸支を分ちて、各々別に掌ざる所あり、且その數の確定するに至れ

るは、稍後代の事に屬す。**藝文女天**に九人あり。曰く**美音**、Kalliope 曰く**史詩**、Clio 曰く**悲曲**、Melpomene 曰く**舞踊**、Terpsichore 曰く**抒情**、Thalia 曰く**天文**、Ourania 曰く**妙樂**、Euterpe 曰く**愛憐**、Erato これなり。美音は叙事詩及凡へての科學殊に修辭學の女天にして、羊皮紙の一卷と筆とを以てその持物とす。史詩は歴史及叙事詩の女天にして、又紙卷と筆とを持物とす。故に**美音**と**史詩**とは往々これを區別すべからざることあり。**悲曲**は悲劇の女天にして、悲傷の假面及楛若くは劍を以てその持物とし、又葡萄葉の冠を着く。舞踊はその名の如く即ち舞踊の女天にして、龜甲琴とその**彈具** Plectrum とを以て持物とす。抒情は抒情詩及嚴正なる神徳の頌歌を掌ざる。別に持物あることなくして、滿分なる被着の服裝と、嚴肅なる思惟の相貌とを以てその特徴とす。喜曲は滑稽劇及祭儀の女天にして、滑稽の假面と曲杖とを以てその持物とし、常春



藤の冠を被る。天文は即ち天文学を掌ごる女天にして、一手に天球を把り、一手に小箸ウツリヤを持つ。妙樂は音楽の保護者にして、その名エウテルヘエは絶妙の義なり。或は曰く、妙樂も亦抒情詩を掌ごる。その持物は雙管笛なり。愛憐は戀愛の詩賦を主とし、幾何學及貌技を併せ掌ごり、又能く人の戀愛を保護す。通例大なる絃器を以てその持物とす。又往々薔薇及「ミルテウス」の冠を着けたり。如上の藝術上差別は、恐らくは歴山派歴山大帝ごろの希臘藝術の時代に成れるものならむ。

羅馬人は懸識神婢 *Carmena* を以て唱歌を併せ掌ごる者とし、以てこれを尊崇せり。中に就いて、ヌマ王史中のエゲリヤ *Peonia* 最も善く世に知らる。エゲリヤはヌマ王の師にして、且その妃たり。有名なるヌマ王の法典は皆その指教に成る。王の歿するや、エゲリヤ哀に堪へず、流涕雨の如し。こゝに於いて、獵女終にエゲリヤを化して一溪流と爲せり。

云ふ。羅馬の詩人は是等の諸神を以て、喜びて希臘の藝文女天と同視せしものゝ如し。

歌洲の諸聚珍館には、古代の藝文女天の諸像を蔵す。「ワチカン」に在るもの蓋し最も佳作なり。その悲曲第五十圖、抒情、喜曲第五十圖、及妙樂第六十圖等



像曲戀のンカチツ 圖四十五 第



第七十五圖

伯林聚珍館の抒情像



第六十五圖

カチアの妙樂像



第七十五圖 カチアの喜曲像

殊に見るべし。伯林聚珍館の抒情カチア七十五圖及ミュンヘン彫塑館の美音カチア八十五圖も亦頗る美作とす。

優美女天 Kypris, Charles,  
Gratia, Graces

優美女天の希臘名「カリテス」は、梵語の「ハリト」Harit、この語原を同じうす。たゞひこれより出でたるに非ずとするも、優美女天の神性は頗るハリタス Harias に似たるものあり。ハリタスは印度の日天 Surya の車に駕する耀ける馬にして、その名は綠色を義とす。而して優美女天の太



圖八十五第  
像音美の館藝彫ンヘンユミ

陽の光輝を表するものなることは、その所生の系譜に由りてこれを徴するに足れり。通途の所傳は、この女天を以て、記憶の天父ヘンクレスと交はりて生む所と爲すと雖も、或は日天ヘリタスと陽光アイグレイテとの子とし、ヘシオドスヘシオドスは天父と曙海エウリノエとの子と爲せり。曙海は周流エウリノエと滋潤マクテリスとの女にして、その原名「エウリノエ」は廣大を義とす。これ曙光の大海より出で、宇宙に擴がるを表するものなり。優美女天は即ち天と曙とより生じたるに外ならず。テロスの日光像は右手に弓を把り、左手の掌上にこの女天の三小像を載せたり。これ太陽の光線を表する所の矢として作りしものなること明かなり。而して、優美女天は太陽の光輝を表すこと雖も、殊に日出の美麗なる光景にして、就中陽春の日出より來れるものなるを見る。所以者何と云ふに、その名の希臘語基「カリス」Kypris, Charlesは優美、歡喜、恩澤等の義を有し、陽春の日光の自然を美化し、一切の生物を

喜ばしめ、種々の幸福を與ふる所の觀念を表するを以てなり。ホメロスに從へば、別に優美 Charis と云ふ女神ありて、火天に配せり。優美女天の染女の化粧を爲すと云ひ、酒聖の伴と爲ると云ひ、又後代の詩家のこれを以て染女と酒聖との諸女と爲すも、皆かくの如き神性に基けるなり。

優美女天は三人あり。曰く華麗 Aglaia 曰く歡樂 Euphrosyne 曰く少壯 Thalia 此れなり。或はこれにパシテヤ Pasithea を加ふるこゝあり。常に染女に隸從して、衣服粧飾の諸事に仕ふ。然れども又屢く酒聖その他の諸神に扈從するこゝあり。有らゆる人間をして一層美麗にして且快樂ならしめ、以て眞の生活の幸福を享けしむる者として尊崇せられき。天界の諸神と雖も、優美女天その席に侍らでは、饗宴を開くこゝなしと云ふ。希臘人は會食に臨みてまづこの女天の名を唱へ、又これに初饌を捧

ぐるを常とせり。而のみならず、音樂、辯舌、詩賦乃至諸藝術は、一として優美女天の靈手に依りて高上の神化を受けざるなしと爲し、詩家ピンドロスの如きは、その所作を以てこの女天の賚と稱せり。又感覺と思議との孰れを問はず、一切絶妙絶美の諸法乃至有らゆる智慧、勇壯、仁慈、快活及歡情の如き、人の他をして快く感ぜしむる所のものは、總べてこの女天より流出し賦與せらるゝものなりと信ぜられき。

羅馬のグラチエエは、全く希臘の神傳の踏襲にして、從ひて希臘の優美女天と同神なり。

藝術に於いてこの女天を製作するには、常に婀娜文雅なる妙齡の女子を以てし、喜ばしき愁態の表出もてその特相と爲せり。持物の確定せられたるもの少く、三女天互に兩腕相合はせるを常とし、又往々薔薇若くは「ミルテウス」の花を手にする。上古の希臘藝術に於いては、滿分



天女美優彫浮卓贊古 圖九十五第

の被服に現じて、敢へてその肌を露はさゞりしが、後服装次第に減ぜられ、スコパス及ブラクシテレエスの頃に及びては、その被服は終に全く剥がれて、裸體の像を以て常と爲すに至れり。されど古代の像尙間々遺存す。第五十九圖は古優卓の浮彫なり

法律 *Themis* 及季節女天 *Ouranos*

季節女天は又天父の女にして、法律の生む所なり。優美女天と相似たるものにして、往々これと混同せらる。その數亦三神あり。曰く善令

正しき自然の進歩を表す。神代最古の神たる大空と大地との女法律

は、自然界の不易無窮なる天則の擬人にして、その季節女天の母たるは、蓋し必然なる昔人の想像と謂ふべし。而して法律は又おのづから人間の諸法令を掌どる神たり。天父の命に依りて、諸神の會合を天闕

に招集するを職とするよりして、地上に於いても亦同様の神性を有し、國民の集會及遇客の法を掌どる。羅馬人は法律の所管の中に法令

儀式及神託を數へたり。法律の女季節女天の隸從の勤務も、亦その母に似たる所あり。ホメロスの詩に見るに、この女天は天父の婢として

天闕の門を守る者に描かれたり。その門扉は雲晴る、時即ち開かれ、

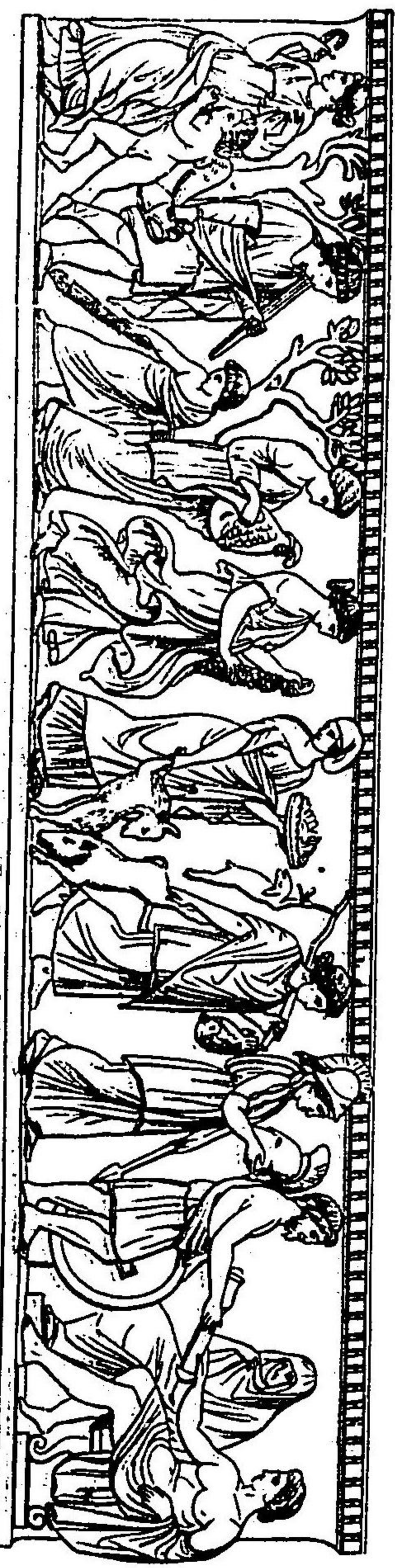
その閉づるや又密雲もて鎖さると云ふ。而のみならず、季節女天は又その母の如く、人間界の有らゆる法則及命令を掌どり、貴重、善良乃至

美妙なるものは、凡べてその保護に依りて成り、又その保護に依りて榮ふと信ぜられき。而してこの女天は又天妃、日光、染女及藝文女天等の婢女従屬として現ずることあり。

希臘人の季節女天に歸依したることに就いては、今知る所多からず。雅典人は特にこの女神の祭典を行へり。されどその信仰したる所は、たゞ花の季節女天たる榮花Orchis Thalia、ご果實成熟の季節女天たる熟果Karpod. Carpo.、この二神のみ。後代に至りては、一年の四季に應ずる四人の女天を立つるに至れり。

造形藝術に於いては、法律の像は通例一手に天秤、一手に棕櫚葉を把る。季節女天は可憐の少女にして、縫ひ上げたる衣を纏ひ、花冠を着け、或は手に花果を執りて舞へる者多し。後代に至りては、季節を表する種々の持物を以て、その掌ごる所を表するものあり。アルバニ莊より

出でたる浮彫第十圖の如きは即ちこれなり。ルウウルにも亦一浮彫の



希臘羅馬諸神傳卷第三 圖十

季節女天を現はしたるものあり。形相持物殆ど前者に同じ。ミューンへ彫塑聚珍館には、平和の財富Plutus、く平和の子、穀女の子、或は日を抱ける像第六十あり。同館聚品中佳作の一に數へらる。右手に長節を把り、左臂に小兒を載せ、深愛の容貌を以てこれを凝視し、その手に小瓶を持てり。小瓶は後世の補加とす。



像和平の館聖影ンヘンユミ 圖一十六第

勝女  
Nike, Nica  
Victoria, Victory

勝女は天父の雷電の敵すべからざる勢力の擬人なり。雅典人は勝利

の女神としてこれを尊び、以て武女の隸屬と爲しき。されど勝女は希臘に於いて特に神廟及祭節を有せざりしもの、如く、たゞ天父及その他の尊神の爲に陪従として現するを常とせり。

羅馬に於いては、勝女の歸依希臘よりも頗る盛なりき。これその民の戦を好めるが故なり。その神廟の主なるものは「カピトリウム」に在りて、戦に勝てる將軍は、その功績の記念として、こゝに女神の像を建立するを常とせり。この種の像にして最も壯大なるものは、アウグストス帝の建立に係り、アクチウムに於ける戦勝の誓願を果さむが爲に造られしなり。勝女の本祭は毎年四月十二日に舉行せらる。

希臘及羅馬の藝術に於いて、勝女は共に有翼の女神として表現せらるゝを常とせり。月桂の冠を着け、棕櫚葉を把る。この二者は、共に古名譽の標幟として勝利者に贈られし物なり。この女神の大像は稀に見

る所にして、大抵瓶若くは貨幣に圖せられ、又小銅像に作らるゝもの  
 多かりき。サモトラケエ島より出でたる零像第六十圖は、今巴里「ルウウル」



像女勝のルウウル 圖二十六第

聚珍館に在り、惜むらくはその頭と兩手とを失へり。雖も、戦艦の艦  
 に立ちて、右手に喇叭を執り、左手に戦利の武器を持ち、輕衣の海風に  
 翻る姿なることを想知すべし。紀元前四世紀の中葉に於けるアッチ  
 カ彫塑の佳作とす。體形、衣褶甚だ美なり。同島の古貨幣の圖に依りて  
 ツムブッシェ Zumbusch, 獨逸 München 現代著名の彫塑家、千八百三十年生る の補全したるものあり。又オリユム

ピヤにて發見せられた

るパイオニオス Paionios, 紀元前五世紀

彫塑家希臘の勝女ニケの大理石

零像あり。グルエツトネ

ル Gullner の補全したるも

のに依りて、その全形を

見るべし。普魯西カッセ



女勝製陶の中品聚室帝ンヘンユミ 圖三十六第



ル Kassel の聚珍館には勝女の小銅像あり。ミュンヘンの帝室聚品中には、陶製 *terracotta* の頗る美なる高肉浮彫に勝女を現はしたるもの 第三十六あり。最もこの神の形相を見るに宜し。

虹霓 Telesphora

ヘシオドスの詩に従へば、虹霓は畏海と周流の女琥珀 Thetys, Electra, Ectra. 或は曰く Mycene 王 Agamemnon の子 の女なり。元た、虹霓の擬人なれども、後漸く變じて諸神の輕捷なる使者と爲り、神命を人間に傳ふる者と爲れり。蓋し自然の虹霓の天地の間に架する橋梁の如くなるに由るなり。さればホメロスの詩に見るに、虹霓の輕捷は實に驚くべし。その疾きこと宛も雲際より落ち來る電骸の如く、天の一方より他方に奔り、大海の祕底に透徹し、下界の幽奥に深至して、以て諸神の命を執行すと云ふ。虹霓は

後又特に天妃の陪従と爲れり。或は曰く、人の死に瀕して氣息の嚙々たるや、その一縷の餘命を絶つ者はこの女神なりと。

藝術の製作に於いて、虹霓は勝女と同じく有翼の身に現じ、服装も亦略勝女に似たり。然れどもその持物の傳令節を以て、勝女と差別することを得べし。雅典處女殿の東面搏風の浮彫に、虹霓とおぼしき零像あり。今英國聚珍館に藏せらる。

少女 Hebe, Hebe, Juventas

少女は天父と天妃との女にして、その由りて來る所の自然を尋ねれば、蓋し宇宙の少壯熾盛の象徴なり。既に全く發達したる希臘の神傳に在りては、諸神の盃盤に侍する酌女にして、その饗宴に臨みて諸神に薦むるに神酒を以てす。希臘の最勝なる大神天父の女にして、その

職のかくの如く卑賤なるは、頗る怪むべきに似たりと雖も、希臘古代家庭の風俗に原づける想像は、おのづからかくの如くならざるべからざるなり。蓋し當時年少未婚の女子は、たゞひ貴族乃至王室に在りても、尙家人又は賓客の食に仕ふる習慣なりき。後のホメロス風の詩及餘の傳説に従へば、少女は永く諸神の盃酌に侍することなく、曾て祭典の饗宴に侍して、過ちて仆れしかば、父、父天の寵を損してその職を罷められ、トロヤ王の子薦Leukippe, Ganymedes 代はりてこれを勤む。少女は終にヘラクレエスと婚せり。而して少女は希臘の宗教組織の上に於いて一の重要な地位を占めず。たゞその父母及良人ヘラクレエスとの關係よりして尊ばれしのみ。

羅馬のジュエンタスは、希臘の少女に相應したる女神なり。されど餘の諸神の例に見るが如く、羅馬人はその國運の増盛を以て、又この女

神の加護に歸し、政治上公共上、稍これを重じたり。故に「カピトリウム」Capitulum 天父廟の中に於いて、少女の一祠ありき。

少女の像は古代に於いて甚だ稀なりしものゝ如し。今に至るまで發見せられたる無數の古像中、全く少女と視るべきもの一もあることなし。たゞ瓶又はその他の浮彫に於いて、往々ヘラクレエスとの結婚の圖を現はせるを見るに過ぎず。高尚優美なる謹淑の女子にして、酒



圖四十六第  
像女少作ヲノカ

瓶を舉げて神酒を傾くる所を寫すを常とせり。以太利の彫塑家カノ  
ワCanova 1757-1822の少女像第四十圖は近古の作なり。雖も著名の傑作にして、そ  
の模型廣く世に行はる。

薦僮 Πρωτόγονος  
Ganymedes  
ガニメデス

薦僮はトロヤ王トロスTrosの子にして美少年なり。天父Ζευξ鷲をしてこ  
れをオリュムポスに致さしめ、化して不死の神と爲し、以て少女の職  
を繼がしむ。後永く諸神の饗宴盃盤に侍す。たゞ薦僮の天父の鷲に奪  
はるゝ章段は、ホメロスもピンダロスもこれを述べず。然れどもこの  
話説の事相は、頗る藝術上の好題目たりき。初め雅典の畫家アポロド  
ロスApollodoros 紀元前四百八十年ころこれを畫きてより、美少年の鷲に奪はる所は屢  
と藝術家の製作に上れり。羅馬の詩家オウィウスは天父みづから鷲Ζευξ

に化してこの寵人を奪へりと爲せり。

藝術上遺作の最も著名なるものは、雅典の彫塑家レオカレスLeochares 紀元前三



像僮薦のンカチア 圖五十六第

百七十の作に成れる銅像にして、その模品第五十圖は「ワチカン」に在り。鷲の



像 僮 薦 作 ン セ ル ワ ル ト 圖 六 十 六 第

薦僮ガニノニツエスを攫みて翔り行く所を現はしたり。ナポリ聚珍館にも亦薦僮ガニノニツエスの像あり。近代に至りても往々薦僮ガニノニツエスを作れる者なきに非ず。就中丁抹コオペンハアゲンCopenhagen.の彫塑家トルワルゼンThorvaldsen.の作第六十圖を最も著名とす。薦僮ガニノニツエスの鷲をして鉢に飲まじむる所を現せり。

### 天上現象の諸神

日天ヘリオス  
Helios, Sol

日天は巨靈高光ヘリオスと曙光ヘリオスの子なり。故に日天も亦一巨靈ヘリオスと稱せらる。即ち太陽の象徴にして、永くその由りて来る所の自然の本義を保ち、希臘人の想像に依りて向上の神性に致さるゝことなく、その做大を日光に譲りて、終に劣位の神級に止まれる者なり。然れどもアイスキアポロンロスアポロン eschylus. 希臘悲壯曲の祖 525-456 B.C.よりして後、往々日光アポロン及射光アポロンと同視せらる。蓋し日天の崇信は、載籍ありて以來最も古し。その神性は言ふを待たず。尊容殊に車輅の相似たるより推すも、吠陀の日天と關係あるものゝ如した。希臘に於いては、日天ヘリオスの歸依せられし處多からず。その本地をロオデス島とす。毎年の祭典に方りて、こゝに競樂及鬪武を行ひ、又有名な

る盛儀の行列ありき。詩人の描寫する所に依るに、日天ヘリクスは一の美少年にして、金光燦爛たる兜を被り、その毛髪も亦金色の光を放ち、身光燦灼ヘリクスとして世界に耀く。毎日の職とする所は、その日の光明を神人の兩界に致すに在り。晨に「エチオピア」Ethiopia人の住へる東方周流の極より出で、天空に沿ひて漸く西し、以てその職を行ふ。後のホメロス風の詩家は、日天ヘリクスの常に謂はゆる太陽車に乗ることを説く。太陽車は駿駟を駕せる戎車なり。而してホメロス及ヘシオドスは、日天ヘリクスの没する所の西極よりして、翌朝出づる所の東極に至るには、如何にして何處を過ぐるかを説かさざりければ、後代の詩人は、黄金の船に乗りて世界の半面を周航すヘリクスと爲し、以てこの難義を釋したり。或は曰く、金色の小舟にして舟に翼ありと。或は曰く、黄金の寢床に臥すヘリクスと。而して日天はその休する所の西極に壯麗なる宮殿を有す。又有名なる花園あり。謂はゆる

日没女ヘリクス Hesperides, Hesperides. 幽暗と暮夜との諸女、或は曰く、戴城の子日没の花園に住し、園中に黄金の林檎を蔵す。 の花園これなり。

日天は周流の女ペルセエヘリクス Perseus. 黒海の東に在る國の王アイ

エテエスヘリクス Atlas. 及魔女、Kyklops. 光輝 Phaeon. を生ましむ。 アイエテエスは、彼の

金色の羊毛皮を得むが爲に、「アルゴオ」Argo's艦に乗りて、コルキスに向ひたる五十勇士Argonauts の話説に於いて頗る著名なり。魔女はオヂュッ

セウスのトロヤ戰歸途の話説に於いて有名なり。光輝ヘリクスは善御に誇らむとして父日天ヘリクスの馬を御し、その車を覆せしかば、天父ヘリクスその害の天下

に及ばむことを恐れて、金剛杵もてこれを殺せりと云ふ。古の人は太陽を以て一巨眼と爲し、天上の最高處に在りて、眈を決して普く地上を觀るヘリクスと想ひ、從ひて日天ヘリクスは世界の事物悉く見聞せざる

なきを以て、祕密の罪惡もこれが爲に露顯せらるヘリクスと信ぜられ、嚴重な

る宣言及誓約の證神として崇められき。

希臘の日天ヘリオスに關する話説は、總べて詩家オ井ヂウスの爲に、元「サビニ」人の神なりし羅馬のソオルに踏襲せられ、曾て疲憊を感ぜざる天界の車人として、戎車競走の守護神と信ぜらるゝに至れり。然れども終に宗教上眞の信仰の高位を占むるに及ばざりき。

藝術の表出に於いては、通例美少年に作らる。その頭に着けたる冠には、一年の月數に應じたる十二條の射光を具す。大抵車上に立ちて、その上衣は肩より後に翹飛せり。然れどもその多く製作の題目と爲れるは、主としてロオデス島に限りしものゝ如し。紀元前三百八十年、こゝに日天ヘリオスの爲に巨像を建立す。その高さ約三十二米突あり。當時ロオデスの大物と稱して、その名頗る高く、世界七奇の一に數へられき。リ

ンドス Lindos, Rhodes の彫塑家カレエス Chares の作とす。シュリイマン Schliemann 獨逸の



圖七十六第 像天日るせ掘發りよヤロト

人所々の古址を發掘せり、1922-1930 のトロヤより發掘したる物の中に、日天ヘリオスの浮彫第七圖あり。その像容上に説く所の如く、又駟馬の車に乗れり。

月天 Maiya, Selenc, Myva, Mene, Luna

月天は日天の孖胎の同胞なるも、猶獵女の日光第七圖にして太陽を表し、月天は女神にして太陽を

に於けるが如し。日天は男神にして太陽を表し、月天は女神にして太陽を表す。日天の往々日光第七圖と同視せらるゝが如く、月天も亦屢々獵女第七圖

と混淆せらる。これ獵女のもと太陰の擬人に出てたればなり。而して又日天の想像上做大を日光に譲れるが如く、月天も亦その由來する自然の相同じき獵女の爲に、向上の神性を占められて、獨り小神の劣位に止まれり。故に希臘に於いては、曾て眞の神として尊崇を受けしことなし。原名、セレエネエは月光の清澄を表する名にして、その盈虚時あり、以て曆月を成すに名づけて、メエネエと呼ぶ。詩家の説く所に依るに、月天は麗はしき鬢髪の上に銀光の輝ける冕を冠りて、白衣を纏ひ、晩に世界を周匝せる聖河より出で、白き駢馬を駕せる車に乗り、虚空の穹窿に従ひてこれを行る。その相貌頗る印度の蘇摩 Soma 即ち月天の白衣を着けて白鹿羊の車に乗れるが如し。想ふに神傳の本を同じうするものならむ。月天の性は靜淑にして且佻柔なり。竊に美少年を愛し、その睡眠を伺ひてこれに接吻す。詩人の好みて描寫せるは、

月天のエリスの王子春陽 Ephelus, Erythion, 或は牧羊者又獵者 に對する密戀なり。春陽は將に落日の海面に淪まむとする綺麗なる光景を人化せるものにして、この時に方り、明月既に地平線に出で、清婉の光を放ち、宛も落日に對してこれを戀ふもの、如き景象あるよりして、かゝる話説は生ぜしなり。春陽は一日長途に疲れて、ラトモス山 Lamos, 小亞細亞 Caria に在り の洞窟に眠る。月天その美を愛し、天より降りてこれに近づく。或は曰く、月天春陽をして無窮の睡眠に入らしめ、常にこの洞窟に息はしむ。爾來月天は夜ごとに寵僮春陽を洞中に訪ひ、極歡の容を以て黙して春陽の睡相を凝視す。と云ふ。或は曰く、春陽は天父の爲に不老の術を得たりと。月天は啻に獵女と紛らはしきのみならず、後代に至りては、又往々隱月及植女と混同せらる。羅馬のルナも亦これに同じ。されど羅馬にはアエンチヌス丘に月天の神祠ありき。蓋しセル井ウス、ツルリウス王

の建つる所なり。羅馬人は月天を以て、又その同胞日天の如く競馬場の神と爲し、公共の勝負に於いてこれを崇拜せり。

月天は彫塑に於いて、その前頭の半月及頭後を覆へる巾を特徴とし、て表出せられ、手に松明を把るを常とす。その像古くは横さまに馬に騎りしが、後には多く二馬を駕したる車に乗る。眠りたる春陽は墓碑又は記念標に於いて頻りに用ゐらるゝ題目なり。

曙天 Ἡώς, Aurora

黎明の女神曙天も亦高光と曙光との女にして、日天及月天の同胞なり。印度にも亦ウシヤス Ushas ありて、神性の由來を同じうす。曙天初め星 Ἄστρον の一人なりと云ふと婚して諸風伯の母たり。或は曰く、曙天は日天の子にして、風伯及晨星を生めりと。風伯に四神あり。北風 Boeotus, Aquilo 西風 Zephyrus

東風 Eurus 及南風 Notus これなり。この諸風伯を以て曙天の生む所と爲すは、風の常に黎明に起るに由れる神傳の法式に過ぎず。星空は諸巨

靈と共に天父に叛きしを以て、下界に投ぜられたり。こゝに於いて曙天は美貌の獵夫オオリオオン Orion と婚せむとす。されど天神はこれを

允さずして、オオリオオンは獵女の神箭にその命を殞せり。後曙天はトロヤ王の子衰老 Trojanus, Tithonus の王と云ふと婚し、衰老に不滅の性を賦せ

むことを天父に請ふ。然れどもその永く少壯なる性を與へられむことを請ふを忘れしかば、たゞ不滅の性のみなる神賚は、いとはかなき

ものにして、衰老は皺よりたる老者と爲り、曙天は復これに對して歡ぶことなきに至りぬ。然れども曙天は衰老との間に、エチオピアの王

メムノン Memnon を生めり。メムノンはトロヤ戰の話説中著名なる一王にして、往いてトロヤを援けて、アキレウスの殺す所と爲る。曙天はそ



の切愛の子の死せるを悼み、爾來斷えず慟哭し、その流涕は露と爲りて常に地上に降る。衰老は後天父の爲に蟬或は蝶に化せらる。而して曙天のかくの如く伉儷の縁拙きは、曾て軍神と通じたるを以て、染女大いにこれを妬み、曙天をして人寰の諸々の美男に對して戀情を起さしめ、而る後その少壯美麗を喪はしめしに由るなりと云ふ。

詩人の描寫する所に從へば、曙天はその髮麗はしく、その腕、その指、薔薇の如き美人なり。夙にその寢床より起き出で、泪芙藍色の衣を纏ひ、その馬炳明Lampusと光輝Gloryとに駕し、日天に先だちて早く晝日世界に告ぐ。實に清新爽快なる一幅の畫圖と謂ふべし。

希臘人の曙天エオラスに關する見解と話説とは、又羅馬の詩人の爲に、毫も改竄を受けずして、女神アウロラに移用せられき。アウロラは又た朝母Mater Matutaと稱せらる。羅馬人は曙天を以て黎明の女神とするこゝ、希臘人に同じきのみならず、又出産を加護すと爲して、女子は殊に厚くこれを尊信し、又白女Leukotheaの如く、舟人をして危難を免れしむる海洋及港灣の慈神と崇めき。

曙天は藝術上に於いて、雕壁又は瓶畫に現さるゝもの多し。或は日天の如き駟馬の車を驅り、或はその翼もて風をあふぎ、或はその露を地



圖天曙畫壁宮シオリスノ羅馬 圖八十六第

上に瀧ぐを常こす。羅馬「ロスピリオシ宮」Palazzo Rospihiosiの壁畫第六十八圖は近世の作なり。雖も頗る著名なり。

### 星宿

諸星宿中神傳上最も肝要なるは、朝暮に現はるる「啓明」Phosphorus、こ長庚ヘンヤウ Phosphorusにして、希臘人はこれを二星と稱し、太古より特に尊重せり。藝術の上に於いては、その手に松明を把れる美少年として表出せらる。即ち金星なり。又前に述べたる「曙天」の寵人オオリオオンに關する種々の話説あり。オオリオオンは「獵女」の神箭に殺されし後、みづから化して一の星座と爲れり。その犬を「狼星」Lupus、こす。この星の出づるは則ち一年中の最熱の候にして、これに次ぐに雨季を以てす。その餘尙星宿に關する神傳少からず。「雨星」Pluvie Hyades は金牛宮の面に當れる五個

の星群なり。もと「戴域」Daiyoku Plioneと「滿女」Mannyo Plioneの諸女にして、謂はゆるニエサの神婢なりしが、「酒聖」を養育したるが爲に、「天父」に嘉せられて、化して天上の星座と爲る。「雨星」の出づるは暴風雨の前兆なり。こ爲し、舟人は爲に航海を避くるを常とせり。「雨星」と相關して、又「プレイアデス」Plades あり。亦「戴域」と「滿女」の諸女にして、七人あり。「天父」戴域の天球を負ひて常に苦めるを憐み、この諸女を化して又星座と爲す。ポイオチヤの傳説にては、この諸女山中に於いて獵夫オオリオオンに追はれ、「天父」の助を祈りしかば、「天父」即ちこれを星宿に化せり。こ云ふ。或は曰く、鳩に化せらると。プレイアデスは金牛宮の頸に當れる七星 Mata, Electra, Celeno, Sterope, Tayete, Merope は、他の六女の皆天神に化して、己獨り人間なるコリントス王シシュフォス Sisyphus, Aelos の子、下界の歸に出づ。こ婚したるを耻ぢて、その姿を匿せりと云ふ。最長

の女は即ち雲霓にして、その美を以て天父に愛せられ、使神の母と爲れり。希臘人はブレイアデスを以て舟人を守る星と爲す。蓋しこの星の出づる五月の頃は、最も航海に宜しき時なればなり。北斗Apokr. Arcusも亦希臘の神傳に入れり。北斗は元アルカヂヤの神婢大熊Callistoにして、曾て牝熊に化して獵女に殺され、天父の爲に星宿に化せらる。大熊は貞潔の誓を破りて天父と交はり、一子小熊Arctosを生めり。小熊又化して星座と爲る。即ち小熊星これなり。

風伯

印度の風天Wataは吠陀大神の一たり。雖も希臘の風伯の擬人は大いに發達せずして、自然の象徴に止まれり。四風伯の名は既に曙天の條に擧げつ。この諸風伯は殊に航海を業とする者に尊崇せられ、舟人は祈禱と供物を以てその惠を祈れり。然れども風伯は永くその自然の象徴の本義を以て、極めて劣位の神級に在りしが故に、希臘の神傳上さまで重要なものに非ず。諸風伯中北風Boreasは最も暴烈にして、處女を奪ひ去る者として畏れられ、羅馬人はこれをアクリクリロクリと呼べり。アツチカの傳説に依るに、北風はエレクテウス王の女オレイチオリチエオリチイヤオリチの色を愛し、その曾てイリッソス河Ilissos南に、Ortyiaに合す

の岸に逍遙するに乗じて、これを伴ひ去れり。云ふ。オレイチエイヤは北風と交はりて、碧玉Calais及求索Natesの二人を生めり。碧玉、求索は共に彼のアルゴオ艦五十勇士の一人なり。北風はかくの如く奪女者として畏れらる。雖も、雅典人は深くその惠に頼り、北風の爲に神壇及禮殿を建てき。こは曾て波斯戦の時セビヤス岬Sepiasの邊に於いて、北風の波斯王クセルクセスXerxesの一部分の艦隊を破壊せるが

爲なり。

北風の冬の暴風雨の怖ろしき神なるに反して、西風トラキカスは陽春の歡迎使たり。これ一季節女天のその妃なりと云ふ傳説ある所以なり。羅馬人はこの風伯を呼ぶに、恩賚ファウニスの名を以てす。蓋し西風の能く植物を長育繁茂せしむる勢力を言ふに外ならざるなり。

東風エウロス及南風ネオスは、時として餘の諸風伯と共に別處に住すと稱

せられ、或は又迅速王アイオリヤの治下にして荒誕の話説あるアイオリヤ

島ホリア、シチリアの北岸、Messinaの北西に在る地中海中の火山群島、Lipariに於いて、王と共に風山火山を言ふ、Stromboliに住すと

信ぜられき。迅速王も亦風神にして、能く風を洞中に藏め、又能くこれを放ちてその暴威を逞うせしむと云ふ。

統領シユルラの世、アンドロニコス、キユルレステスAndronicos、Cyrustesの建てし

雅典の八角塔訓はゆに、薄肉浮彫の風伯の圖、第九圖あり、以て古人の想像

せし所の形相を見るべし。皆有翼の男神に作れり。

像伯風の塔風典雅 圖九十六第



風北



風東



風南



風西

治病及出産の諸神

醫方 Asklepios, Aesculapius

治病及出産の守護者として特に靈神を建立するに至れるは、恐らくは後代に屬することならむ。羅馬人の信じたる如き醫方は、ホメロスは詩中の神として、曾て現じたることなし。この神の歸依は、その鎮座の主廟たるエピダウロス Epidauros の市を本地として、後漸く弘まりしもの、如し。醫方の仕祝は、こゝに大病院を設けて、大いに世に重ぜられき。その治病の通法は、たゞ病者をして神殿に眠らしむるに在り。祈禱と奉養とに能く信神の熱誠を表したる病者には、醫方その夢中に現身して、以て應病の藥餌と療法とを教ふと信ぜられたり。こゝを以て病者は皆犠牲を獻じ、或は誓願の扁額を捧げて、歸依の衷を布くを常とす。その靈驗の顯著なるを以て、信仰甚だ高く、五年ごとにこゝに醫方の大祭典を擧げ、盛大なる競争、闘武ありき。

醫方は日光の子にして、母はポイオチャの王フレギュアス Phlegyas の女

鳥鵲 Kopatik Coronis なり。曾てアルゴオ艦五十勇士の一行に加はりて、その軍醫

たり。治病の術に長じ、能く必死を起して生に回すを以て、大いに死者の數を減ず。閻魔これを忌み、天父に請ひて金剛杵もてこれを殺さし

む。日光は金剛杵を造るに與りし隻眼の神を殺して、天父の以て醫方を殺したる怨を霽らせりと云ふ。醫方は飲女 Epiione と婚して有名なる

外科醫ポダレイリオス Podalirius、マカオオン Machaon 及健女 Hygieia, Salus 等の子女ありき。

醫方の歸依は、數年の間烈しき疫癘の都邑及村落に流行せしが爲に、紀元前二百九十一年、始めて羅馬に傳へられたり。巫覡の商議に依り

て、エビダウロスの醫方アスクレピウスを移祀することゝ爲り、醫方の神蛇は勸請の大使に從ひ來りて、羅馬のチベリナ島 *Tiberina* をその鎮座の處に撰び定めたりと云ふ。こゝに於いて醫方の廟をチベリナ島に建て、夢感の療法又盛にこゝに行はれ、後紀元前十三年に至りて、鍍金の神像を造設せり。

エビダウロスの黄金象牙の大像は、既に全く滅びたれども、醫方の像は尙存するもの少からず。大抵慈仁の相を具へたる老境の有髯男子として表現せられ、蛇及犬を伴ふを常とす。蛇は最も醫方の飼養愛撫する動物にして、能くみづから新にする活力の象徴たり。又占術の標幟と爲す。犬は即ち醫の能く病者を看護する不眠を表す。その餘醫方の神性を表する持物には、治病の相を圖し靈藥を盛りたる鉢、束草及鳳梨等あり。伯林聚珍館の醫方アスクレピウス第十圖七及ナポリ聚珍館の醫方アスクレピウス第七十の像



圖十七第  
伯林聚珍館の醫方像

は、共に蛇をしてその杖に纏はしめたり。ミロ島に於いて發見せられ、英國聚珍館に藏せらる。醫方の首は、その規模壯大にして、而も頗る美なり。雅典の天父ゾニスの廟側に現存する像は、その首鬚けたりと雖も、亦甚だ佳作なり。その餘アスクレピウスフイレンツエ、巴里及羅馬等の諸聚珍館に著名の像を存す。ワチカンの醫方アスクレピウスは無髯に作られたり。



第百一十七圖 ナボリ葉珍館の醫方像

治病及出産の劣位諸神

希臘人は出産の女神として天妃の女助産 *Euboea* を尊崇せり。即ち分娩

の時に當りて女人を加護する神にして、もと天妃の別名なりしもの如し。醫方の子健女は亦仁術の女神と仰がれき。

羅馬人も亦健女を信じてサルス *Salus* と呼び、一に生育 *Sirenia* と稱す。而

して特に出産の女神を立てず。與光 *Lutina* は即ち希臘の助産と同神な

り。雖も、幾もなくして却りて獵女と同化せられたり。たゞ護産 *Carina*、*Cardea*

を以て産房戸闔の守護神と爲し、深夜に來りて新に生れたる嬰兒の

血を吮ふ妖鴟 *Striges* を逐ふと信じたり。六月一日これを祀り、又以て健

康の守護神とす。その餘環年 *Anna*、*Perenna* と稱する神を立て、長壽と健康と

をこれに祈れり。

# 運命の諸神

宿命女天 Moirai, Parcae

宿命女天は羅馬名バルケエを以て最も行はる。古の人は人間の生涯こそその運命の一分とを以て、出生の時より早く既に定まれるものこと信じ、これを掌どる女神を建立したるなり。されば人間の運命は人毎に同じからざるが故に、その女神の數は従ひて人間の數に應ずべきなり。然れども希臘人は好みて三を以て聖數と爲し、これを以て有らゆる不定の數を總持せしむるを常とせるが故に、この女神の數も亦三者を立てつ。而して希臘人は又是等の運命の力を以て、幽昧にして摸索すべからざるものと爲し、宿命女天を以て暮夜の生む所の諸女と爲せり。その三神とは、曰く紡絲 Klotho, Clotho 曰く配賦 Atropos, Atropos 曰く執着 Lachesis, Lachesis 曰く配賦 Atropos, Atropos 曰く執着 Lachesis, Lachesis

れなり。



古賢卓浮影宿命女天像 第七十二圖

羅馬人は始め宿命女天の二神を立てしのみ。第三の女天は、希臘の神傳と契合せしめむが爲に、後に附加せられたるに過ぎず。

宿命女天は概して沈靜なる老女と想はれしかど、藝術の表出は多くこれに従はずして、壯齡の女子に作るを常とせり。初めその持物は皆一樣にして、各別の性格は未だ三神に賦せられざりしこと、猶一古賢卓の浮彫 第七十圖 に見るが如し。その後紡絲は



生命の絲を紡ぎ出し、配賦はこれを持して命數を分配し、執着はこれを斷つ者と爲れり。この神性の別は、後代の藝術家の採り用ゐる所に



圖天女命宿露ロセンアルエカ！ 圖三十七第

して、これを表現せむが爲に、通例その持物として、紡糸には紡錘、配賦には羊皮紙の一卷、執着には天秤を持たしむ。或は執着をして剪刀を把りて絲を切らしめ、或は漏刻の面に死期を點ぜしむることあり。ミカエル、アンゼロ Michael Angelo. 1475-1564. の宿命女天圖 第三十の如きは、これに據りて才思を構へたるものなり。獨逸近古の畫家カルステンス Carstens, 1754-1809. 獨逸藝術の復興者の所作にも、これに似たる暮夜及宿命女天圖あり。

復酬 Nemesis

ホメロスはこの女神のこゝをその詩中に説かず。蓋し復酬の廣く尊崇せられしは、稍後の時代に起りしものなるべし。復酬は能く道義世界の平衡を守り、當に善果を得べき者には、これに應じたる幸運を賦し、當に惡報を受くべき者には、又これに應じたる非運を授け、個々の

人間の果報をして、正しくその作業に對應せしめ、毫も均等を誤ることなき嚴正の女神なりと信ぜらる。これよりして、人間の惡事罪業を行ふ者に、必ず相應の罰を與ふる復仇の神性は、おのづから人の理想に上りぬ。この性格に於いて、復酬は頗る執仇女に肖たり。復酬も亦暮夜の女とす。或は曰く、天父の妃神鳥の後の名なりと、羅馬人の信じたる復酬の神性も、亦上に述ぶる所と全く相同じた。羅馬人は復讐即ち正義の神と、戰に向ふに臨みて、これを祭りて犠牲を供す。その戦ふは即ち正義の爲にする意なればなり。さればたとひ通途の信仰は寧ろ畏怖の邊に在りて、親愛の心を以てこの神に對することなきこと雖も、その像は「カピトリウム」天父廟の域内に建てられき。

藝術の製作上、復酬の表出は、その取る所の神性に依りて同じからず。道義の上に立ちて正人に良果を與ふる善神としては、嚴正にして思

慮ある容貌の若き女神に現はされ、その手に尺度及韁又は舵を把れり。韁と舵とは司命の具にして、尺度は配賦の具なり。これに反して、罪惡に對して寛假することなき復讐の神としては、その手に劍若くは鞭を持ち、驚首獅身獸を駕したる戎車に乗り、有翼の形相に現ずるを常とす。

幸運 *Fortuna* 及 祥福 *Felicitas*

幸運は周流と滋潤との子なり。都邑の守護神として尊ばれしが故に、希臘本土及亞細亞の大都市には、到る處その神廟及尊像ありき。後裔に吉運のみに止まらず、凶運も亦その掌ざる所にして、人間の貴賤貧富皆一にこの神に由ると信ぜらるゝに至れり。羅馬の幸運も亦これと神性を同じうす。セル井ウス、ツルリウス王は幸運の崇拜を羅馬に傳

へたりと稱せらる。蓋しツルリウス王はその諸々の祥事を以て、この神の恩賚に外ならずと信じ、僥倖フォルトゥナ幸運Fortunaの爲に特に神廟を建て、六月二十四日を以てその例祭日と定めたり。これより後、幸運フォルトゥナの歸依は頗る盛なることを致し、諸々の異名を附して、或は國家、或は私人の諸業務を守る者と爲し、こと、猶羅馬國民幸運Fortuna Populi Romaniなど云へるが如く、從ひて神廟及禮殿の建立せらるゝもの夥しかりき。その最も著名なるものを、アンチウム及ブレエヌステPreneste羅馬の南の一市、今のAlatrinaの宮殿とす。

幸運の外に、羅馬人は積性の吉運の女神として、祥福フォロチアと稱する神を尊信せり。ルクルルスLucullus羅馬の統領は、この神の爲に羅馬に神廟を建てたりと傳ふ。この廟には、ムムミウスMummiusアハイスAchaicusのコリントスを滅ぼせし時紀元前百四十六年掠奪したる神像を安置せり。然れども、幸運及祥福は、未だ以て古の民の宗教上の歸依心を充たすに足らず。こゝを以て更に個人の

運命守護神を求め、希臘人、羅馬人共にこれを立てたり。希臘人はこれをデモン「Daimon」と呼び、羅馬人はこれをゲニウス「Genius」と稱す。これ即ち個人の守護本尊にして、生より死に至るまでその身を離るゝことなく、生活の諸階段を通じて、示教と慰藉とを與ふる者なりと信ぜられ、酒、菓子及香料の供物を捧げ、人は皆その誕生日に當りて、特に花冠をこの神に奉るを常とせり。

幸運は藝術の製作に於いて種々の持物を賦せられたり。その最も肝要なるものは舵にして、即ち人間の運命を司る權力の標幟なり。又或は寶椔を把り、或は花若くは穀物、果實等を以て充實せる兕觥Cornucopiaeを持つ。兕觥は人に吉祥を與ふることを表するものなり。又公正なる司命の女神とする後代の理想は、球上又は輪上に立てる形相を寫したる藝術作品に現さる。現存諸像中稍大なるものは、ミューンヘン彫塑

館の石像第四十圖及シキエオンのエウチエキデス *Eutychides* 所作の一摸品



像運幸の館彫影ンヘンユミ 圖四十七第

「ワチカン」に藏せらるゝもの第五十圖最も記すに堪ふ。この像は曾てアンチオオク *Antioch* 亞細亞の都に安置せられしものなり。都邑の守護神として、



像運幸のンカチロ 圖五十七第

頭に城形の峩冠を着け、左手に穀物の束を把る。又同聚珍館の「幸運」像は、左手に舵を提へ、右手に果穀を充たせる兕觥を把れり。英國聚珍館所藏の「幸運」も像容殆どこれに同じ。

## 江海の諸神

海王 Ποσειδάων, Poseidon,  
Neptunus, Neptune

海王は羅馬名にてネプチューヌス云ふ。時間と空間との子なり。ホメロスホメロスはこれを天父の弟と呼ぶ。さればその天父ゼウスに服従するは自然なり。然れども通途の所傳に従へば、天父は時間の諸子中最も少くして、たゞその能く残酷なる父を殪したるに由り、諸兄を越えて宇宙の主權を握り、海王ポセイドンも亦已むことを得ずしてこれに従ひ、その弟よりして、江海諸神を統御する職權を頒たれたり。或は曰く、海王はその封ぜられたる江海の、天父ゼウスの治する天界に比すれば甚だ劣れるに慊らずして、閻魔ハデスと共に天父の廢立を謀り、事成らずして終に天闕を追放せられたり。故に海王はオリュムポスに居らずして、アイガイ海エーゲイック 細亞と希

間この海の中の黄金宮に、その後海王妃アムテリスと共に住すこと信ぜられき。大海及周

流この海の如く、海王はもまた、海水の象徴なりしが、後漸く做大せられて、

全く獨立したる神性に達したり。ホメロスの詩に現れたる海王は、實

に海洋當體よりも勝れるものに非ずして、たゞ大地を周匝限制し、又

これを支ふるに足る手腕を具へ、強大なる威力を有する司命の神と

して貌せられたり。さればその表性の名號を廣治Εὐρύπλοτος, Eurycriton、又は

潤胸Εὐρύστενος, Eurystemusと云ふ。皆その掌どる所の江海の廣大を表するものなり。

その持物の稍は即ち主權の標幟にして、海王のこれを以て一たび海

を撃つや、激浪怒濤忽ち起り、遙に廣く陸上に汎濫して、船舶は盡く微

塵に摧破せらる。而のみならず、海王は又自在に地震を起す力を有し、

或は嶄巖を劈き、或は海中に島嶼を扛起す。故に海王の一名を震地者Σεισθητής

<sup>Ἐνοσίγαιος</sup> <sup>Enosigaeus</sup> と稱すかゝる暴力を逞うすると同時に、その一聲の叱咤、その一盼の睥睨は、如何なる強烈の暴風雨と雖も、倏忽にして能くこれを鎮むるに足れり。羅馬の詩家井ルギルは、その作「<sup>Æneid</sup>」の第一篇に於いて、猛烈なる海水のこの神に馴服するさまを敘したる美文を出せり。かくの如き熾盛の神性は、更に靜海（<sup>ἠαῖα</sup>）の如く航海の安全を守護する徳を附加せられて、おのづから舟人、漁夫等有らゆる海員の主神と爲り、その守護者として無上の尊崇を享けたり。航海の途に上る者は、必ずまづその加護を禱り、海上の危険を免れて安穩に歸着したる者は、常に供物を捧げて報謝の誠を布く。海豚は即ちこの平和の神性の標幟にして、又能く海上の危難を救ふ者と想はれたり。蓋し海豚の風波收まりて後水面に現るゝを常とするが故に外ならず。こゝを以て海王は、殊に航海を業とせしイオニヤ人の爲に、最高の尊崇を

以て皈依せられ、その殖民の存ずる處、行くとして宮殿、神壇及尊像の造設あらざるはなく、殊に港灣の都會又は島嶼、海角に多かりき。その無數の神祠中、コリントスに在るもの最も著れたり。謂はゆる地峽祭の競争、闘武は、こゝに海王の爲に舉行せられ、後次第にピュロス（<sup>Pylos</sup>）市の一雅典及ロオデス、コス、テノスの諸島（<sup>Tenos, Gyades</sup>）に於いても、この日を以て海王の祭日と爲せり。

希臘人の地震を以て海王に皈依したるは、その殊に島嶼、海岸に起るこゝ多かりしが爲に外ならず。蓋しコリントス附近に於けるアイガイ海底の噴火に原するものなり。希臘人はこれを以て海王の逆鱗に因ると爲して、大いにこれを懼れ、特に犠牲を供してその怒を和らげむこゝを力めたり。然れども一面又地震を以て海王の人間の爲に大地を揺り固むるものなりと信じ、以て建造を能くする神と爲し、一にこ

れを築居 Daulatrig, Domatrig と稱す。而して地震の爲に新島の海中に出て來ること、ドイタリナク 希臘に於いて敢て奇とするに足らずして、皆この神の涌出せしむる所なりと信じ、こゝに新に海王の廟を建つるを常とせり。かゝる神性よりして、海王の下界を鎖す銅扉を造り、又はトロヤ城を築けり。この話説は生じ來れるなり。當にイオニヤ人のみならず、希臘の民は凡べて航海に従事する者多かりしを以て、この民族の生活上、海王は甚だ重要な地位を占め、地方ごとにこれに關する諸々の傳説の出で來れること、誠に自然の數なりしなり。トロヤの詩に在りては、トロヤ王ラオメドオン Laomedon の不正に激せられたる海王の忿怒を描くに、宛もトロヤ軍の如き強烈のさまを以てせり。海王は王の懇求に従ひて、日光の幫助の下に、トロヤの城壁を築きたり、或は曰く、日光は築城の工事に與らずして、王の爲にその畜群を守れり。ラオメドオンは

初め約したる報賽を全うせずして、海王を欺きしを以て、海王は大いに怒り、怖ろしき海妖を遣はして、その收穫を蕩盡し、その住民を鑿殺せり。王恐れ悔みて神託に従ひ、その女ヘシオネエ Hesione を犠牲として海妖に獻ず。然れどもヘシオネエは幸にしてヘラクレスの爲に救はれたりと云ふ。かゝる妖怪の話説は、海水の汎濫を表したる寓意に出でしものにして、これと相似たる所傳頗る多し。たゞへばペルセウスがエチオピア王の女アンドロメダ Andromeda の巖頭に綁られて海妖に喰はれむとするを救ひし話説の如し。又往々海王の有名な英雄の父たる話説あり。その最も著きはテエセウスの事なるべし。由來希臘の都會又は一地方の創開者若くはその祖先たる英雄は、出生の傳を神系に取らざる者稀なり。古の民は海を以て最も猛烈なるものと爲し、その想像よりして、終に海王をして諸々の巨人及妖怪

の父たらしめたり。たごへば神婢**迅波** Θοοσα をして、殘虐なる隻眼の巨  
人**喧囂** Polyphemos を生ましめしが如し。オヂュッセウスは喧囂を殺して、  
海王の釋くべからざる忿恨を買へり。ヘラクレスに退治せられし  
巨人**對敵** Anteus も亦海王の子と稱せらる。テエセウスに殺されたるア  
ッチカの行劫先擊 Pocustes 及ケルキエオオン Kerkon 勿謗 Aoidai 等の諸妖  
怪も亦復然り。或は曰く、擔夫 Phorus 及初女 Phorus も亦海王の子なり。こ  
海王の愛獸は馬にして、その創造せる所なりと云ふ。滿潮の時に當り  
て、風の海上に起るや、波濤は雪白の聚沫を冠して、遙に天際より奔來  
し、その迅速なること比するに物なし。この光景は、古の詩人の通語と  
して、駿馬の豐鬣を振ふにたくへられ、終に海王の怒濤の間に奔馬を  
驅ることを想像せるなり。詩篇イリヤドスに依るに、海王はその車に  
銅蹄金鬣の駿駟を駕し、身に黄金の甲を著け、手に燦爛たる鞭を執り、

出で、海上に馳騁し、許多の眷屬跳躍游泳して前後を圍繞す。駟馬は  
奔りて飛ぶが如く、海波は喜びて路を開き、潮水曾てその車を浸すこ  
ごなしと云ふ。これ固より曙光の金色に映じたる海面の波動を形容  
せしものに外ならず。然れども希臘人は單に自然の敘事に止まらざ  
りき。雅典に於いては、馬の起源を以て海王と武女の競争に歸した  
り。事は既に武女の條に述べつ。又コリントスに於いては、海王蛇髮と  
交はりて有翼馬 Pegasus を生ましめたり。傳ふ。或は曰く、有翼馬はペル  
セウスの蛇髮の首を斬りし時、その血よりして化生せり。是等の話  
説は、おのづから海王をして能く馬を馴服する神たらしめ、終に海王  
を以て又競馬の守護神とじてこれを信ずるに至れり。故に競争場に  
してその神壇あらざるはなく、競走者はまづ祈禱と供物とを以てそ  
の加護を願ふを常とせり。馬の外、海王の爲に神聖なるものは、海豚及



松樹にして、これに次ぐは黒犢、牡羊、野猪等なり、殊に松樹の重ぜられしは、その最も多く造船に用ゐられたるが爲なり。而して海王は常に海豚又は馬を駕したる車に乗り、人魚Tritonの部族及江海の女神等これに従ふを常とす。

羅馬人は希臘人の如く航海を業とする民に非ざりしを以て、海王の歸依は希臘に於けるが如く盛ならざりき。而も尙その羅馬人に尊ばれたるは、主として馬及競走に關する神性に在り、故に海王の羅馬に於ける第一の宮殿は巫祝演技場に在りて、これが爲に特に保護せられたり。又ベスツム Pestum、南以太利に海王祠の遺址を存ず。

海王は又能くその稍を用ゐて巖石を劈き、涌泉を出す。その往々神婢若くは水邊に住める女人を愛したる話説あるはこれが爲なり。

希臘及羅馬に於ける海王の造形術上表出は、詩家の説ける所とほ、

善く符合せり。詩の描く所に依るに、海王の身長及形相は、概ねその同

胞天父と同じく、厚潤なる胸廓、暗色にして波状を爲せる頭髮、及瞻視

の猛利なる眼を以て特徴とす。而して藝術家は海王の像に賦するに、

稜角ある面貌、及豎立せる蓬髮を以てし、以て強烈熾盛の性格を示

せり。その相頗る嚴酷なり。雖も、その唇邊には天父の像に同じき温

容の表せらるゝを見る。持物は稍の外に舵柄あり。司命の具としてこ

れを執るなり。稍は天父の金剛杵の三鈷なるものゝ變形せられしか、

或は漁具の鈎より出でしかを明にせず。

古代の海王像の存するものは甚だ多からず、ワチカンには頗る美な

る胸像及大理石立像を藏す。ラテランの海王像は左手に稍を把り、右

脚に舟を踏みて瞰視し、脚下に一海豚あり。雅典聚珍館の大理石像

は左手を腰に置き、右手に稍を執り、遙かに海上を眺むるものゝ

如し。脚下に海豚あること前者に同じ。



像王海館珍案典雅 圖六十七第

海王妃 Amphitrite

海王妃の名は「イリヤドス」中にこれを見ず「オヂュッセエ」にはその名

あれども、海王の後に非ずして、單に江海の一女神たり。ヘシオドスの詩に於いては、靜海族中の一人たり。さればこの女神の海王に配せられたるは、稍後代の事に屬し、海王の江海の主神として無上の尊勝に達せし後に在るものゝ如し。

海王妃は周流オキエイトリスと大地ゲとの女なりと云ひ、或は靜海の女なりとも云ふ。通途の話説に従ふに、海王は靜海族中にその舞容を見てこれを愛し、

ナクソス島Naxos, Egean 海中最大島より伴ひ去れり。或は曰く、女神は海王の粗野なる求愛を避けむとして、戴域アトラスの許に逃れしかば、王の海豚はこれを尋ね出して、終に伴ひ歸れり。妃は海王との間に人魚及波底ベネトスを

の二子を擧げたり。ロオデス島の傳説Rhodos の時に依れば、神婢ポシ薔薇リナ

も亦海王妃の生む所なり。或は海王の正后たる名譽よりして、靜海族の母も亦この女神に皈せらるゝことあり。

羅馬人は別に女神洪濤 Salina を立て、海王の妃と爲せり。故に海王妃 アマイトリクエ は毫も羅馬人に尊崇せられざりき。

藝術に於いて、海王妃は優美なる妙齡の女子に現され、裸程若くは半ば衣を着けて海王の側に従ひ、或は獨り戎車に駕するを常とす。寶石の彫刻に、海王妃の大いなる人魚の背に坐し、又は海馬若くは海豚に駕するを見る。その頭髮は亂れて肩に垂れたり、冕及寶楛を以て、海女王たる標幟の持物とす。或は間々海王の稍を把ることあり。

海王妃を現したる遺品中最も重すべきものは、ミューンヘン彫塑館の浮彫なるべし。こはもと羅馬の「サンタクロオチ」Sanctuary 宮殿に在りき。圖は海王妃の結婚なり。妃は車上に在りて水上を行く、貝を吹ける人魚これを導き、妃の母賚女 Ασπυ, Doris の女、Ποσειδών 周流の婚儀の松明を把りてこれに先だち、人魚族 Τριτωνες 及靜海族これを圍繞す、又染僮あり。この浮彫はその

作風より觀るに、希臘藝術最良の時代に屬する製作にして、恐らくは紀元前四世紀頃の物なるべし。この頃に當りて、名匠スコパスあり。好みて海妖を作る。蓋し婉轉たる魚尾の如きものを以て、最もその技巧に適したる題目としてこれを取れるならむ。スコパス曾て小亞細亞 Βιθυνία, Propontis の一市の爲に、海神の群像を作りしことあり。後羅馬に移されきと云ふ。この浮彫もこれと出處を一にするもの、如く、獨逸の學者は、たごひスコパスの作に非ずとするも、その門下若くは末流の手に成れるものと爲せり。

人魚 Τριτωνες 及人魚族 Τριτωνες

人魚はホメロスの詩に上らず。ヘシオドスの詩に於いては、海王と海王妃の子にして、父母と共に海底の黄金宮裡に住する大身強力の

恐るべき神たり。アポロニオス、ロヂオス

Apollonius Rhodios. 希臘の詩人、紀元前二百四十年 Alexandria に生まれ、後 Rhodes 島に住し、

凡そ百年許生存せるもの、如しの詩に依れば、人魚は猶靜海族の如く慈悲の神性を有し

て、海上に於ける一切の諸事を知れり。故に往々靜海族と混同せらる

ることあり。アルゴオ艦五十勇士の話説に在りては、アルゴオ艦の

暴風の爲にリビヤの沿岸に漂着せし時、人魚は希臘の諸勇士の前に

現身し、これが爲に力を添へ教を垂れて歸路を指示し、みづから艦を

導きて大海に出でしめ、以て危難を免れしめきと云ふ。又リビヤ沿海

の邊には、別に人魚に關する話説あり。蓋し人魚はもご外俗の神なり

しが、シシリヤ及埃及等に往復せる舟人に依りて、希臘に傳へられし

ものなり。然れども殆ど海妖の列に齒せられて、神祇たる尊崇を受け

ざりしもの、如し。人魚の由りて來る所を考ふるに、恐ろしき波濤の

轟聲を表したるに外ならず。さればその持物は螺貝にして、人魚のこ

れを吹くや、不可思議なる猛烈の聲を發し、如何なる音響と雖も、これ

に當ること能はずと云ふ。曾て巨人戰の時、人魚は急にこれを吹きて、

神敵をして駭き走らしめしことあり。ロヂオスは人魚を以て、上半身

人にして下半身海豚の形相と爲し、藝術の製作に於ける現相も、亦こ

れに従へり。而して詩家及藝術家は、一人魚を立つるに止まらずして、

早くこれと同様なる人魚族あることを想像し、これを以て、宛も陸地

に於ける羊脚人 Μηροποι, Satyrus の如く、悪作放縱なる種族と爲し、或は靜海

族と共に音楽を奏して、海王及海王妃の鹵簿を成す所の愛すべき一

群と爲せり。

この空想的形相の怪神人魚及人魚族は、藝術に向ひて頗る意匠と技

巧との變化を與へ、往々浮彫の群像中に表出せられ、又後世頻りに噴

水その他水工の莊飾に用ゐられたり。然れども人魚當體の獨立して



第七十七圖 第カチノ人の魚群像

高等の藝術に製作せられたるもの稀なり。而して馬の前脚を以て人間の上半身及海豚の下身に着けたる人身馬脚魚尾族 *Ichthyocentaure* の形相は、蓋し人魚より出でたるものなり。或はこれを以て人魚族の形相とす。ワチカンにこの典型に屬する人魚の神婢を奪ひ去る大理石群像あり。

靜海 *Nereus* 及靜海族 *Nereides*

大海及其の苗裔の事は、既に略諸神の由來の條に辯じたり。今その苗裔中多少神祇として尊崇せられ、又多少藝術上に用ゐられし者に就いて説く所あらむとす。大海の諸子中最も長じたるを靜海とす。靜海は海洋の靜穩快活の相を表せるものにして、親切慈仁なる老父として現じたるアイガイ海アイガイの海精なり。靜海族と稱する五十人の可憐の諸女と共にその海に住し、船舶の難破するものあれば、則ち出で、毎にその舟人を救ふ。有らゆる水神は皆懸識を能くする性を有するを以て、靜海も亦識言を與ふと信ぜられたり。たゞ希臘人は特に靜海の懸識の神性を尊重せざりしのみ。靜海は又變相自在の通力を具へ、識言を求むる者あれば、みづから他物に化してこれを避くと云ふ。曾てヘラクレスの黄金の林檎を獲むが爲に日没女の花園に行くや、途に靜海を要して、これを獲べき法を教へむことを求む。靜海身を種々

の形相に變じて、ヘラクレスを避けむここを努む。然れども静海は終にヘラクレスの熱心に負け、已むことを得ずしてこれを教へたりと云ふ。

吾人をして海波の岸を打つ光景と聲響とを敘述せしめば、多くはたゞ死語を列ぶるに過ぎずと雖も、希臘人の描寫せし所は大いにこれに異なりて、活潑々、生躍々の趣あり。微風海上に起りて波浪稍動くや、希臘人は即ちこれを敘して曰へらく、静海の諸女はその父の深居より出で、波上に浮び、或は河口に來り、或は汀渚に上りて、その麗質を輝かし、互に手を執り、聲を合せて、且歌ひ且舞ふ。その舞容嬌婉にして愛すべく、その聲調水陸に響きて誠に樂むべしと。好箇の形容、眞に一幅の畫圖ならずや。静海族は蓋しこれよりして神傳の擬人法に上れるなり。その數或は五十人と稱し、或は百人と云ふ。皆これ江海の人間

に與ふる所の通商の便益、生産の富源、その他諸々の幸福乃至海上の美なる光景を表したるに外ならず。而してこの諸女神は静海の周流の女賚女と交はりて生ましむる所なり。一にこれを江海の神婢と云ふ。この諸女も亦親切慈仁なる海洋の神婢として尊ばる。或は危難に臨みて舟人を救ひ、或は樂しき游泳又は舞踊もて舟人を慰むる不可思議可憐の種族なり。この一群は常に海王及海王妃の鹵簿を成す。或は曰く、海王妃ももこの群中の一人にして、その美を以て擇ばれて海王の妃と爲れりと。静海族中詩上に最も有名なるアキレウスの母美女テチスは常にこの一群の首長として描かれたり。その嬌婉なる麗質は、天父と雖もこれを戀へりと稱せらる。テチスは終にテッサリヤの一王ペエレウスに嫁せり。ペエレウスのテチスを娶れるは、神託に依りて、テチスの子の必ずその父よりも勝らむことを誥げられけ

ればなり。

藝術に於いてネイレウス靜海は通常その髮灰白なる老人として現され、持物と



英國國家博物館の靜海族像 第八十七圖

して寶楮若くは稍を把るを常とす。靜海族は妙齡の美女に描かれ、古

くは輕装を着けしが、後代全

く裸體と爲れり。海豚、人魚族

又はその餘の荒唐なる海妖

に駕す「ワチカン」に靜海或は曰

の巨大なる首像あり。頗る温

和の相貌に作られたり。英國

聚珍館靜海祠 LuciaのXanthosにて

に靜海族の零像あり。又一古

瓶の畫に靜海族の一女が海

豚と共に遊ぶ圖等あるを見

き。



第九十七圖 古瓶畫靜海族

畏海 Θαλασσα 怪父 Γοργων 及怪魚 Κητος

靜海及其の諸女は海上の平和の光景を表す。雖もこれに反して畏海は怖畏の世界にしての江海の象徴なり。周流の女琥珀を娶りて、虹霓及旋風の父たり。虹霓の事は既に天空現象の諸神の中に述べつ。旋風は即ち颶風の擬人にして、初め美女として貌せられしが、後には半人半鳥なる有翼の身に表出せらる。その顔は處女にして、軀は秃鷲の羽もて掩はれ、その爪は獅子の如く、顔色蒼白、形容憔悴して、斷えず飢餓に悩み、食へども決して飲くことなしと云ふ。アルゴオ艦五十勇士の話説中、常にトラケエのサルミデッソス Salmidesos の警王フイネウス Phineus の卓上の食を盗みて去りて、これを苦しむる怪物として頗る著名なり。古の人は旋風を以て又人をして不意に死せしむる者なりとせし、その數二三ありと爲せり。怪父は怪魚とは畏海の同胞にして、又海上の怖畏の光景を表したるものなり。怪父は怪魚と交はりて龍女、怪女及日没園の龍等を生ましむ。皆これ海底の危険恐怖の象徴なり。龍女及怪女の事は、具さにはペルセウスの話説に見るべし。

海王奴 Ποσειδων

海王奴は極めて劣位の神なれども、亦懸識の能を具し、常に海王の從僕たる老夫にして、又海底に住める魚及其の餘の水族の主神と信ぜられき。トロヤの話説に在りては、靜海のヘラクレエスに於けると同様の傳説あり。アガ멤ノオンの弟メネラオスのトロヤよりの歸途、埃及の海岸に至りしは、この老夫の百中の助言を求めむが爲に、これをその常居フアロス島 Paros, Alexandria に訪へるなり。海王奴は身を獅子、龍



豹、野猪及其餘の諸物に變相して、この英雄の懇求を避けしかど、終にメネラオスの精根に負けて、これに答へたりと云ふ。

海王奴は藝術の製作に於いて、常に人魚の如く人首魚身の形相に表出せらる。曲杖を以てその持物とす。

翠波 *Thraxys*  
*Clancus*

劣位の海神中、翠波はアルゴオ艦五十勇士の話説にその一部を占むるをもて、又記するに堪へたり。翠波はたゞポイオチャのアンテドン港 *Anhedon* の民に信ぜられたる一地方の神祇にして、その崇拜は希臘の諸所に弘まらざりき。莊麗なる神廟をば有せざりしかど、アンテドンの舟人、漁夫には、極めて高く歸依せられたり。蓋し當時の庶民は、凡べて向上の重要なる諸神よりも、劣位の小神の寧ろ己等に親近なるこ

ごを想ひて、却りてこれに信心を傾けしなり。話説の傳ふる所に依るに、翠波は元アンテドンの一漁夫なりしが、不思議の法もて忽ち神祇の位に昇れり。翠波一日漁獲して、その半死の魚を泥上に置きしに、一水草に觸るゝや、魚は俄かに蘇生して、海中に跳り入れり。翠波これを見て大いに驚き、即ち魚の觸れし所の名も知らぬ水草を取りてこれを食ふ。奇なる哉。翠波は忽ちにして活潑なる感覺を起し、おのづから鼓舞して海中に躍り入るに至れり。こゝに於いて周流と滋潤とは、その一切の人間の不淨を去り淨めて、翠波をして神性を發得せしめ、これに與ふるに海神中の一地位を以てせり。爾來翠波は難破の船舶及舟人を救ふ慈神と爲り、希臘の島嶼及海岸の所々に於いて尊崇せらるゝ者と爲りぬ。

藝術に於いては、翠波も亦人魚の如き形相に現はされ、粗野多毛の容

貌にして、その身は種々の海草もて掩はれたり、殊にその頭髮鬚の茂れるを以て、海神たる特徴を表す。

白鷗 Λευκοπτερος, Ivois, Ivo, Neurobia, Leucoha 及角觥 Κερατις, Melicertes, Παναιών, Palamon

白鷗は蓋し波を掠めて海上に飛翔する白鳥の人化なり。傳へ云ふ。元カドモス王の女にして、酒聖の母。春野の同胞なり。白鷗は又翠波の如く、海に跳り入りて忽ち不死の神性を發得せし者なり。ポイオチヤの傳説に依るに、白鷗は初めオルコメノス Ochomenos, Boetia の市王アタマスの Athamas 妃たり。春野の Πρυμφα 天妃の電火に觸れて不幸に死するや、白鷗はその遺兒酒聖を托せらる。天妃の嫉妬は春野死すと雖も尙足れり。こせず。更に白鷗の夫アタマス王を狂亂せしむ。アタマス既に狂して白鷗の生め Λευκοπτερος る所の己の長子レヤルコス Learchos を捉へ、巖に擲ちてこれを殺し、更に

その次子角觥を殺さむとす。白鷗は驚ろきて狼狽し、角觥を伴ひて逃れ奔り、狂王アタマスの爲に追はれて、コリントスの地峽に到る。白鷗免る、に途なくして、終にモルリス Moliris 巖頭より身を躍らして海に投ぜり。こゝに於いて、靜海族は憐みて親しくこれを迎へ、白鷗と其の子角觥とを海神に化したり。或は曰く、角觥は海豚に救はれ、コリントスに上陸して神と爲る。又曰く、角觥はもごヘラクレスに似たる Παιων フマイニチャの英雄なり。イノオ及メリケルテエスは、その神化以前の名にして、これより後白鷗及角觥を以て稱せらると云ふ。又傳ふる所に依るに、アタマスには先妃の二子戰慄 Φόβος, Phobos シヘルレエ Ήρως, Heros あり。白鷗はその繼母と爲りていたくこれを虐待す。二子耐ふること能はず。共に金毛の羊に乗り、海を越えてコルキスに逃る。ヘルレエは途にして溺れて死せり。後人その處に名づけてヘルレエの海 Hellespont, Marmora

Archipelago 海とを繋げる歐羅巴、小亞細亞間の海峡今の Dardanelles と云ふ。而して白鷗及角觥の二神は、又上の數神と同じく、大海の慈神として、難船及その餘の災害に當りて、能く人を救ふと信ぜられき。オヂュッセエの中に描寫せられたる白鷗も亦然り、暴風の爲に必死の境に陥りたるオヂュッセウスに教ふるに、舟筏を捨て、泳ぐことを以てし、更に一靈巾を與へてその難を救へり。白鷗はその名の如く純白の女神にして、陸上に在りては美女に現ずることあり。角觥は海豚に乗るを常とす云ふ。

妖女 Maenads, Sirens, 蜃

妖女等も亦海神の中に數へざるべからず。歌曲に巧にして以て聽者を誘惑し、終にこれを殺すと云ふ。オヂュッセウスは曾てこの女神の住める島邊を過ぐるに當り、深慮して一策を案出し、蠟もて盡くその

徒の耳を填め、みづから身を檣に縛し、その歌曲を聽くも、誘惑の術中に陥ることなからしめ、辛うして安全なるを得たる話説あり。妖女

等は周流と大地の子アケロイオス河神

Achelous, Aiolia と Aetnaia とを流する大河、或は曰くこの河神は怪

父と怪魚との子なりとの女なりと傳へらる。ホメロスの詩に現はれたるは、二人の

妖女のみなれども、後代に至りては、三人又は四人ありと想はれ、又種

々の話説に入れり。たこへば、アルゴオ艦五十勇士及シシリヤ島所傳

の植女に關する話説の如し。穀女はその女植女の妖女等を伴ひてア

ケロイオスの野に遊べるに方り、下界の神に奪ひ去られし時、妖女等

の行いてこれを救はざりしを怒り、妖女等の身を鳥形に變じたりと

云ふ。或は曰く、妖女はオヂュッセウスの爲に、その魔術の無効に販じ

たるを以て、自失の極海に投じて終に死せり。

惟ふに妖女も亦海鳥の一擬人にして、女首鳥身の怪神なり。その由り

て來る所を考ふるに、もと希臘の某地方に於ける江河の神婢にして、流水の潺湲の音樂に似たる趣あるより、その存在を想像せられしもの、如しアケロイオス河神の女と云ひ、音樂を善くす云ふは、蓋しこれに原づけるなり。この神性は頗る藝文女天に似たるものにして、妖女曾てクレテエ島に於いて藝文女天に音樂の競奏を挑みしが、藝文女天は妖女に勝ち、その羽毛を抜いて己の頭飾と爲せりと云ふ傳説ある所以なり。兩者共に流水より出でたる女神にして、その美、その能殆ど同じきが爲に外ならず。蓋し藝文女天の信仰のクレテエ島に傳はるや、早く島民に信ぜられたる妖女は、終にこれが爲に覆はれしなり。こゝに於いてか兩者競争の傳説起り、妖女は變じて海神と爲り、更に變じて凶性と爲り、西方シリヤ海峽の邊に於ける危巖、暗礁等に住して、音樂を以て海客を誘惑すに信ぜらるゝに至れるならむ。

その下界の女神に關する傳説の如きは、誘惑の能く死を致すより出でたるに外ならざるべし。音樂と誘惑との關係に至りては、辯を待たずして明かなり。



像女妖の典雅 圖十八第

妖女は藝術の製作上旋風の如く有翼鳥身の美女として現さる。或は人面にして支體は全く鳥身に表せらるゝことあり。或は兩腕、胸廓に至るまで人身を具することあり。その相貌頗る

る印度アジャンタア *Ajanta* 壁畫の乾闥婆 *Gandharva* 及我が國の迦陵頻伽 *Kalavinka* に似たり。雅典より發見せられたる妖女の像 第十圖 は後者の式に

屬せり。この形相に現ずる時は、その手に樂器を把るを常とす。又その音樂の快美を以て、人を誘惑して死に致すが故に、死神として墳墓の裝飾に用ゐらる。後代の藝術に於いては、専ら死の象徴たり。鳥身を取らずして全く美女に作るを常とす。曾て一古浮彫のこの典型に従へるものあるを見たり。

劈女 Σκηνία 及 澁渦 Χρησπίς  
Σκηνία Χρησπίς

妖女は凶性の神なり。雖も、その現相は優美なり。劈女に至りては、妖女と同じくシシリヤ海峽の邊に住すと雖も、その相貌は妖女に反して、正に凶惡の神性を表せり。澁渦も亦殆ど同性の凶神なり。劈女は摧裂破壊を事とし、澁渦は旋捲淪没を専らにす。蓋し前者は嶄巖、後者は旋潮の擬人にして、共にシシリヤ海峽舟航の危險を表したるものなり。元來この海峽は、希臘舟人の最も恐れたる難處にして、船舶のこゝを過ぐるもの、往々巖角に摧け、渦中に没するが故なり。オヂュッセエの敘する所に依るに、劈女は暗黒なる巖窟の裡に住し、鳴聲狗兒に似て更に細く、六首十二脚を有する怪物なり。その口は即ち死の所住にして、三列の齒牙密植せられ、下身は深く海底の穴に在りて、水上にはたゞその首を出すのみ。舟楫若し不幸にしてこれに逢へば、決してその禍を免るべからず。六首は各々一舟人を銜へて水中に奪ひ去る。オヂュッセウスΟδυσσεύςの舟も亦この禍に遇ひ、一行中の六人は忽ち劈女に喰はれたり。澁渦は更にこれに異なり、その口を開きて潮水を吞むや、恐ろしき響は海に轟きて、暗色の水底を現はし、そのこれを吐くや、水は再たび咆哮の音を揚げて、激浪飛沫四邊に漲る。舟若しこれに近づけば、忽ち旋渦の裡に没して、海底に葬られざることなしと云ふ。

この二妖は、共にシシリヤ海峽に於ける舟航の危難を形容したる詩賦の描寫に過ぎず。殊に濺渦カリネプスはかゝる現象の假相に止まれり。雖も、**劈女**に至りては、その擬人法頗る發達して、優に神傳に入れり。或はこれを發煙フエラアエウスと毒蛇ニキトナの女とし、或は怪父フオルキウスと怪魚ケイトスとの女とす。ヘラクレスが曾て巨人を退治し、その家畜を奪ひて、シシリヤ海峽を過ぐる時、**劈女**はその一頭を奪ひ喰ひしが爲に、ヘラクレスに殺されたり。然れども怪父は**劈女**の屍を火に炙りて、忽ちに蘇生せしめたりと云ふ。或は曰く**劈女**は**食人鬼**フエラアエウスの女なり。蓋し**食人鬼**の話説は元リビヤより出づ。傳へ云ふ**食人鬼**は元リビヤの女王なりしが、盡くその諸子を失へるが爲に、性質變じて狂暴と爲り、人の母と爲りて幸なる者を嫉み、常に嬰兒を奪ひてこれを喰ふ。又曰く**劈女**は初め江海の美しき一女神にして、その凶惡の性格は後代の變化に過ぎず。又復曰

く**劈女**は曾て海王に愛せられ、海王妃の嫉妬に由りて、變じて凶醜の相と爲れり。更に一の話説あり、**翠波**曾て**劈女**の美を愛し、その歡心

を得むが爲に、美しき種々の貝と翡翠の雛とを齎らしてこれに贈る。**劈女**涙を垂れてその情を悦ぶ。魔女これを妬み、**劈女**を化して狗吠の怪物と爲せり。爾來**劈女**はシシリヤ海の惡神と爲り、**翠波**は沈鬱の性を帯びて、時として人を害するに至れり。云ふ。



第八十一圖 古貨幣の劈女像

藝術の製作に於いて、**劈女**はその手に劍を把り、その足は蛇尾及狗頭に表せらるゝを常とす。古貨幣第一圖八十及古土器等の圖に於いて往々こ

れを見る。

周流 Okeanos 及周流族 Okeanides

周流の苗裔には無数の水神あり。これを周流族と云ふ。地上の諸河神これなり。古の人は江河を以て盡く源を周流即ち大地を周匝する大流 Okeanos potamoi に發すと爲し、その涌泉と爲りて再び地表に出づるまでは、深く地下を潜流するものと信じたり。周流はその妃滋潤と同じく大空と大地との子にして、共に巨靈の一なること、諸神の由來の條に述べたるが如し。餘の諸巨靈の如く天父に叛かざりしを以て、非運に墮ちず。前來の領域に安堵することを許されて、日月星辰の没する西極に住し、諸神の會合ありと雖も、常にこゝを去ることなし。古の人は又これを海神の一として、舟航の守護を祈れり。

江河は土地の豊饒に關して極めて肝要なるものなるが故に、たゞひ一河神の崇拜はその一地方に局するものなりと雖も、古の民は大いにこれを尊信し、或はその地方に於ける原始の國王と爲す。こゝを以てアルゴスにて河の兩岸に住殖したる民族の始祖と爲す。こゝを以てアルゴスにてはイナコス河 Inachos、ポイオチャにてはアソオポス Asopus、及ケエフィソス河 Kephissos、テッサリヤにてはペエネウス河 Peneus、ペロポンネソスにてはアルフェウス河等、皆神祇として崇められき。殊に希臘の諸河中最も大なるアケロイオスの河神は通國に歸依せられ、ロオデス、シリヤの諸島に於いても、亦これを信じたり。アケロイオスは人首有角牛身の神にして、ヘラクレエスは曾てこれを殪してその角を抜き、神婢の爲に、豊饒の象徴として、花果を盛るべき兕觥と爲せりと云ふ。アソオポスの河神も亦古くは希臘全土に尊ばれて、種々の話説に入れ

り。これに亞ぐをアルフェウスの河神とす。アルフェウスの崇拜は、メテ獵女の信仰と共にシシリヤ島にも傳はれり。雅典に於いてはイリッソスの河神を信じ、フィヂヤスは處女殿パルテノンの西方の搏風にこれを彫出せり。この餘江河の神化は小亞細亞にも行はれ、ホメロスの頃、トロヤ人は生きながら牛馬をスカマンドロス河Σκαμανδροπος、Scamander、トロアに近き河に投じ、犠牲としてその河神に供せり。ミューシヤΜυση、北西小亞細亞の國のカイコス、Καικος、リュヂヤのヘルモスἩρμος、及カウストロスΚαυστρος、Καυστρος、カリヤのマイアンドロス、Μαιανδρος、Μαιανδρος、近世の名はΜαιανδρος、フリュギヤのサガリス、Σαγαρδανη、薩爾丹尼亞等の諸河は、皆神祇として崇められ、往々小亞細亞の傳説に入れり。希臘人は、又外國の大河を神化して、その像を造れることあり。埃及のネイロスΝεϊλος、Νεϊλος、の河神第八十圖「ウチカン」の如きは即ち是なり。所藏

古の人の信ずる所に依れば、河神は又海神の如く、變相と懸識との能



尼羅河のウチカン 圖二十八

を具へ、各その河底若くは水源に近き洞窟の裡に住す。而してその河の廣狹長短に隨ひて、或は童兒たり、或は青年、或は老夫たり。形相の表現に至りては、希臘人の河流に對して感じたる印象に由りて一ならず。その溪壑を出で、蜿蜒として平原を流る、相貌よりして、龍蛇の



表出さ爲れるあり、激流急湍の怒號と猛勢とよりして、牡牛の形相を賦せられたるあり。或は牡羊に描かれたるあり。獸形の河神は混ずるに人間の形相を以てし、有髯の人首にして頭に二角を有し、口より水を吐く者あるを見る。角は或は沃饒の徴たり。或は支流の象たり。又耳邊の小角を除く外、全く人間に貌せらるゝことあり。その持物は果穀を充たせる兕觥を主とす。又豊饒の標幟なり。

羅馬人も亦江河を以て神聖なるものと信じ、ジギニス肇父の子源泉は特に水源の神として尊ばれき。而して又希臘人の如く、河川に依りて各々特有の神を立つ。その尤なるものをナベリヌス河神 Tiberinus とす。ワチカンにその一像あり。意匠極めて前出のネイロス河神の像に似たり。又諸所の涌泉には、大抵懸識若くは魔術を能くする神婢ありて、これに住す。信じたり。その最も顯はれたるを、ヌマ王の妃と爲りしエゲリヤ

藝文女天の保とす。

神婢 Nymphe, Nymphis

神婢には種々の神性あり。雖も、亦水より出でし女神なり。故に往々河神又はネイロス靜海族と混同せらる。ホメロスの詩中に於いては、降雨天父の諸女たり。常語を以てこれを言へば、天上の水雨と爲りて、降りて地中に入り、積聚して泉と爲りて涌出するものなり。されば神婢と雨との關係は、これをアルカチヤ地方に行はれし祈雨の法に見る。干魃の時に當りて、天父の仕祝は清泉の側に行き、犠牲を供して神婢に禱り、樹樹の枝を取りてこれを投ずれば、泉水動きて涌き出し、一道の水氣天に騰りて雲と爲り、以て雨を降らし、地を潤ほすと云ふ。蓋し神婢の神傳上典型は、早くこれを吠陀の天女 Aparas に見る。天女は雲中又は地

上の水に在り。常に天に住す。雖も、時ありて地に降り、意に隨ひて能くその形を變ずと云ふ。元これ雨水の人化に外ならざるなり。希臘の神婢は、天上に在らずして地上に住す。泉源、溪壑、草野等、皆その居る處なり。その所住の境に依りて、神婢に種姓の異あり。涌泉神婢、Νύμφαι ὄρειαι 山谷神婢、Νύμφαι ὄρειαι 樹林神婢、Νύμφαι ὄρειαι 降雨神婢、Νύμφαι ὄρειαι 草野神婢、Νύμφαι ὄρειαι 巖石神婢、Νύμφαι ὄρειαι 等これなり。靜海族も亦江海の神婢とし、是等の一群に數へられ、これに又周流の族を含むことあり。

涌泉神婢は水源の洞窟を以て自然の所居とす。希臘には到る處この種の洞窟ありて、石壁の間より清泉を出す。希臘人は草木の長育を以てこの神婢の恵に販し、從ひて間接に人間及禽獸の食餌を給すと信じ、特にこれが爲に神詞を設くることなしと雖も、篤くこれを崇拜せり。この神婢は又他の江海の諸神の如く懸識の能を有す。元來泉源洞窟等に住する神物の人間に未然の事を教へ、又神智を授くることあり。この觀念は、太古より早く民族の信じたりし所にして、恐らくは日光の神託に先だちて、希臘の某地方に存在せり。想ふに洞窟水源等の幽邃凄愴の、人をして一種異様の感覺を起さしむるに原づけるならむ。この觀念よりして、涌泉神婢は又恐るべき誘惑の力を有すと信ぜられたり。又自然の鑛泉の往々人間の疾病を治する効あるよりして、清水は凡べて諸病を治し、女子の麗質を増さしむるものなりと想ひ、涌泉神婢を以て疾病の起るを豫言し、又その平癒を得しめて、以て人間の健康を守る者と信じたり。アカイヤΑχαια、北岸の一小地方のバトライ市Πατραίηに一清泉あり。その神婢は特に治病の効ありと信じ、水面に一の鏡を吊り下げてその一端を水に浸し、後これを取りて病者の面を映じ、以てその生死を鑑みきと云ふ。涌泉神婢は又詩賦及唱歌の保護者

として尊ばる。藝文女天の往々これと混同せられて、又神婢ニムラフイと呼ばるゝことある所以なり、

山谷神婢も亦その數甚だ多く、所住の山岳乃至地方に依りて、各々特殊の名を有せり。その中最も著れたる者を、ポイオチヤの神婢ニムラフイ反響レゾネとす。反響はケエフィソス河神の子なる美少年水仙を慕ひしが、水仙

のその情に應ぜざるを以て、悲痛に堪へず、憔悴の極、身は變じて巖石と爲り、たゞその音響のみを遺せり。こゝに於いて染女は水仙の女子

の愛情に對する侮蔑を罰し、水仙ナルキッスの一日ヘリコン山に獵するに當り、

その渴を醫せむが爲に、俯して水晶の如き清泉を掬はむとする時、これをして水に映れる己の影に對して、遂ぐへからざる自染に墮せし

む。水仙は終に絶望の悲痛に死せり。その化生せる水仙花は、後世永く無情なる美の標幟と爲りぬ。或は曰ふ。水仙は一人の妹ありて深くこ

れを愛す。容貌水仙ナルキッスと酷似せり。その死するや水仙は常に清泉に行き、己の影を映じて妹の影と爲し、以てその情を遣る。後遂に哀傷に痛死

せり。又オ井ヂウスの詩に依るに、天父曾て諸の神婢ニムラフイと戯るゝに當り、反響は妬心烈しき天妃をしてこれを覺らざらしめむが爲に、遠く

天妃を訪ひて談話に聲を斷たざりしが、天妃終にその策を悟り、怒りて反響をしてみづから言語を發することを得ざらしむ。これより後、

反響は絶えてみづから言ふことをくたゞ、他の聲に應じて、その最後の一句を反復するのみなり。と云ふ。ナポリ聚珍館に水仙ナルキッスと稱する銅

像を傳へたり。樹林神婢は稍後代の想像に出でしものゝ如し。而して希臘人は諸樹

木中殊に榲を尊びたるを以て、從ひて特に榲樹の神婢を重じたり。故にこの神婢の名は榲ニムラフイより出づ。樹林神婢の存在はその憑住する所

の樹木に繋り、その樹殪るゝ時は、神婢も亦死すと信ぜられき、されば不滅の性を有せざるが故に、正しくは神祇の中に數へ難きに似たり。然れども神婢の住する樹木を侵す時は、その罰恐るべきものあり。曾て樵夫あり。一榭樹を伐らむとす。神婢聲を發して免さむことを乞ふ。樵夫聽かずして斧を加へしかば、終に神婢の怒に觸れ、一族と共に永く神罰の禍を受けたりと云ふ。この餘降雨神婢は雨を掌どり、草野神婢は牧場を掌どり、巖石神婢は山巖に憑りて存在すと信ぜられたり。是等の諸神婢は、敢て泉源江海の所住に局せずして、又毎に尊勝の諸神に扈從し、その列群を成す。或は獵女の狩獵に陪し、或は酒聖の酣宴に侍し、或は染女の婢たることあり。その性柔和優美にして、頗る人間に親しむ。雖も、尙人類の住居を避けて、林壑の幽處を好み、時に清泉に浴し、或は紡織を事とし、或は歌舞を演じて、清淡快樂の生活を營むこと云ふ。

神婢の崇拜は太古より希臘に存じ、後漸く羅馬に移れり。羊、牛乳及油等は神婢の爲に靈物たり。藝術に於いては可憐の處女として貌せられ、大抵輕装して花冠を着け、又花を手にす。涌泉神婢は水に縁ある持物を把り、往々水を汲む所の相に表せらる。

249  
67

希臘羅馬諸神傳卷第三終

249

65

希臘羅馬諸神傳 卷第四

希臘羅馬諸神傳卷第四

地及下界の諸神

地及中界の諸神は天上及江海の諸神と頗る趣を異にせり、その威力は断えず地表又は地底に演ぜらるゝものにして、おのづから地上に住殖する人間の生活に、最も密接の關係ありと信ぜられ、希臘人の崇拜の習俗は、頗る激情狂熱の性を帯びたり。羅馬人にはこの風初め全く外邦の俗なりしが、後次第に以太利に瀰漫するに至れり。

古の人は地を以て、自然界の有らゆるものゝ生命の豊富なる無盡藏と爲すと同時に、一面には又地を以て、萬物の現世生存の時期を過ぐれば、盡くこれに淪落する墳墓と爲せり。こゝを以て地神の崇

明治  
45. 4. 22  
内交

拜は、自然物の復活する季節に於ける歡情悅樂と、その衰滅の時候に於ける嚴肅悲傷との、兩種の祭典を以て報謝せられ、その祭節に當りては、皈依の民皆高聲を以て相呼號し、喧騒なる激情を以て、その歡樂と悲痛とを表するを常とせり。而して神祕の要素は常に是等の諸神の崇拜に伴へり。これその住する處の地に在るが爲に、赫々たる天界の諸神よりも、寧ろ大怖畏の感覺を鼓吹するに堪へたればなり。その忿怒は即ち土地の不毛荒寥に表せらるる信じ、以て特にこれを懼れたり。而して祕密の法式はたゞ希臘人の間に存じ、以太利の宗教組織にはこれを見ざりき。今まづ地上の畜群及果穀の長育豐穰を掌ごる上界の諸神を列叙し、漸く下界の諸神に及ばむとす。

大地  
Terra, Tellus

地神の初めに叙すべきはまづ大地にして、即ち地母當體なり。そのみづから渾沌より直ちに化生したることは、既に前に述べつ。實に原始の創造力人化の隨一とす。即ち吠陀の地天 *Prithivi* に當れり。たゞひ大地の崇拜は、空間、竈女、穀女及法律等の如き的確なる諸神の建立せられしが爲に、希臘人の宗教組織に於いて曾て實際上肝要の地位に達せざりきと雖も、後代に及びて、その性格は漸く人化せられ、又造形術上の形相を得るに至れり。上半身を地上に現はし、又地に横臥して手に兕觥を執れる像これなり。羅馬に於ても穀女及竈女に似たる諸神の崇拜に掩はれて、大地の皈依は頗る顯著ならざりしかど、これを希臘に於けるに比すれば、更に肝要なる神祇たり



き。

大地の神性の要義は、自然界の萬物の生命及増殖の根源たるに在り。故に大地は地上萬物の母にして、その有らゆる諸兒孫は、皆この神の爲に親愛の注意を以て守護せらるるに信ぜられ、ヘシオドスの詩及古のドドナの頌歌に讚美せられき。而して大地は又穀女ゼウゼテラ及その他の繁榮豊饒を配賦する諸神の如く、幼者を愛護保育する慈神として尊ばれ、古代の遺物に於いて、屢々この性を以て表出せられたるものあるを見る。

大地は一面に於いて人間の共同の大墳墓にして、毫も寛假することなき嚴酷を以て、萬物を拉して己の暗房裡に墮せしむ。故に又下界の女神の如き性を具へ、精靈メネス後に出づと共に凡べて嚴重なる盟約及宣誓の證者として唱名せられき。

大地の太古の神廟はデルファイに在り。曾てデルファイ懸識 Delphic Oracle と稱せらるる、大地の託宣ことに行はれき。

羅馬人は大地を以て又婚姻の女神と尊び、その神廟はスプリウス、カッシウス Spiritus Cassius の家の傍に在りき。播種時の前後には贄をこの神に供し、その祭節に方りては、大地及穀女ゼウゼテラに牝豚の犠牲を献じ、以て來年の豊饒を禱るを常とせり。

空間 Pala, Pella, Rheia, Kypseli, Cybele

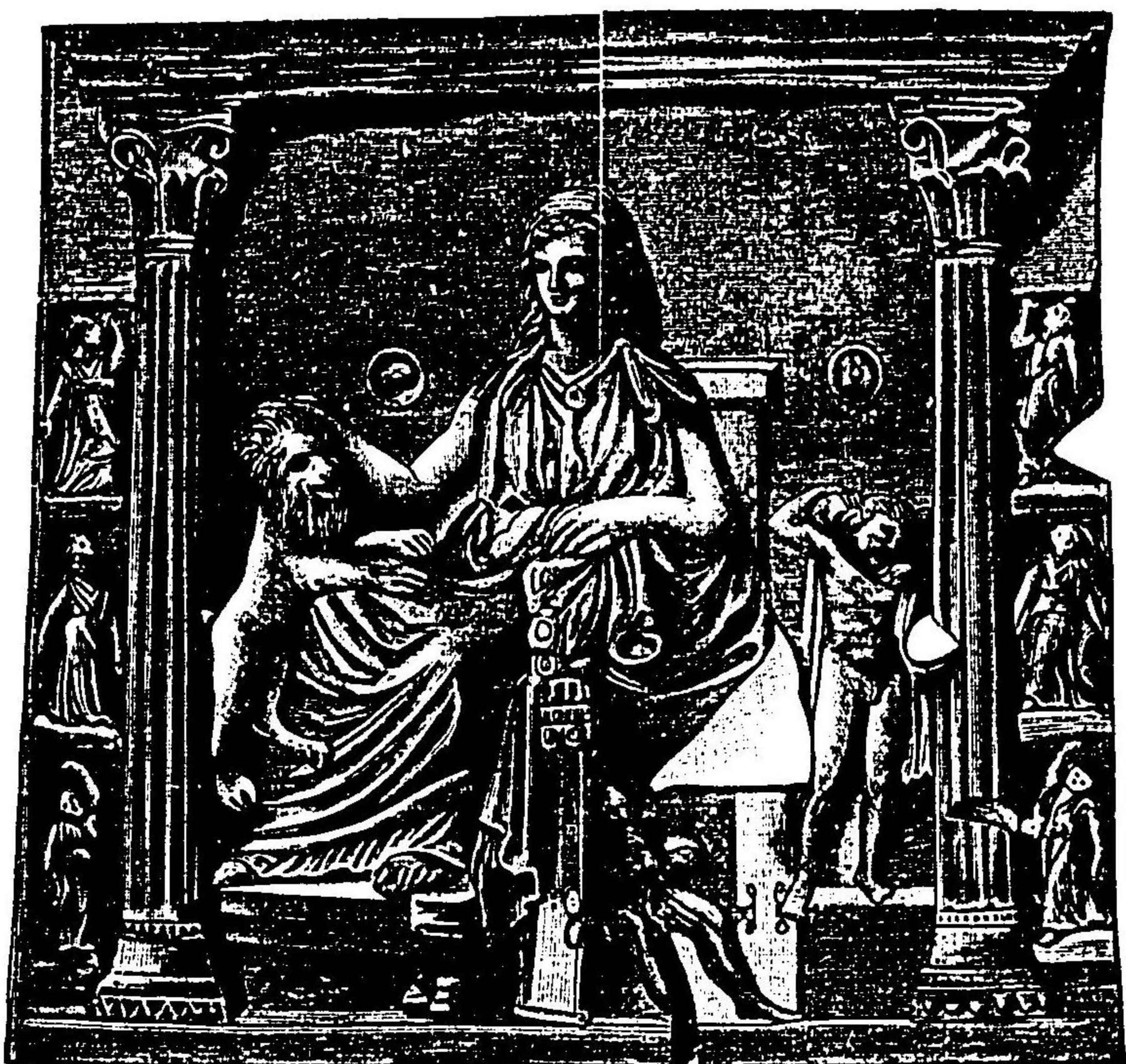
空間は大空と大地との女にして、諸神の由來に於いて頗る著名の神なり。時間の妃と爲りて、天父及その餘の時間族 Chronides の母たり。空間は初め神祇としてさまで尊重せられざりしが、後宛も埃及のイシスの如き亞細亞の豊饒の象徴たるフリーギヤの女神キユベレ

エ大母の同化せらるゝに至りて、大いにその崇信を高めたり。キエ  
ベレエはイダ山に廟祀せらるゝが故に、一にイダイヤTeiaと稱せ  
られ、又天父以下の諸神の母たるを以て、大母Materiaと稱せらる。初め  
リユヂヤ及フリユギヤの全土に崇拜せられしが、後その歸依漸く  
希臘の諸殖民の間に弘まりて、終に希臘本土に傳はれり。紀元前百  
九十一年以來、メガラMegaraのAtticaの首府の競争は、毎年四月四日より  
六日の間この神の爲に行はれ、その崇拜は甚だ喧騒の性を具へた  
り。その後第二のカルタゴCarthagoの北東角の半戦Punic War紀元前二  
百三年の終りに當り、巫覡の商議に依りて又羅馬に傳へらる。この時ペルガモ  
ス王アッタロスAttalosは、紀元前百三十三年、ペッシノスPessinosの住民  
の爲に大母の當體と信ぜられたる靈石を羅馬を贈れり。そのオス  
チヤOstia、Tiberの市に着するや、羅馬全市の夫人等の嚴格なる行列を以て

羅馬府に致され、その到着の日即ち四月十日は、後永く空間の祭日  
と爲り、その祭典には常に競争闘武を行へり。然れどもその崇拜は  
終に盛ならず。蓋し羅馬人の特にこの神の巫祝として奉仕するこ  
とを好まざりしが故なり。而して羅馬の詩人はこの神を呼ぶに城  
母Mater Turrita又の名を以てせり。蓋し空間は人間をして農業を本とし  
て社會を成さしめ、都邑を建てしめたる原始開明の女神なり。され  
ば小亞細亞の貨幣及希臘羅馬の古物には、その像に冠せしむるに、  
城堡の形したる峩冠を以てせり。古代の都邑に在りては、城堡の最  
もその安全に必要なりしを以てなり。  
空間の歸依には密教ありて、その本地はペッシノスの嶢嶠なる山  
地とす。空間の謂はゆる狂祝Koqjparer、Corpantes、及戰丁Koqjparer、Curetes等の如き怪し  
き扈從を伴ひて、その粗野なる音樂を奏せしめ、獅子又は豹を駕せ

る戎車に乗り、喧騒なる行列を爲し、處なり。空間アキアに關する話説は、その祭式と共に又頗る粗野奇怪の性を具す。その所傳の最も著きは、空間アキアの寵人春僮アキア・アキス・アキス・アキスの說話なり。春僮はフリエギヤの少年にして、その極めて美なるを以て、諸神の大母空間アキアの愛する所と爲る。春僮は初めその情に應ぜしが、後これを斷ちて、將にベツシノスの王女と婚せむとす。空間アキア大いに妬み怒り、その婚儀の祝宴開かれて來客既に集まれるに臨み、突如として宴席の中に現身し、主客をして共に恐怖狼狽せしめ、以て婚儀を破りてその無情に酬へり。春僮は逃れて山に入り、終に狂死す。後大抵春分の頃に當りて、春僮の記念として空間アキアの爲に悲痛の祭式を行ふはこれが爲なり。この時女神の仕祝コルダス等は、豫め春僮の像を山中に置き、銅鼓横笛もて聒しき樂を奏しつゝ、山に入りて喪へる美少年を求むる爲し、これを發見したる時、非常の喜狂を發して、刀もてみづからその身を刺し、興奮跳舞するを常とせり。春僮は染女アキアの話説の春草アキアの如し。リヂヤにては、春僮を以て大母の年少なる一仕祝にして、その密教を開きたる者と爲し、後天父アキアの怒に觸れ、リヂヤの野に於いて野猪の殺す所と爲れり。云ふ。又小亞細亞の一話説にては、大母春僮を愛すること深くして妬心を起し、一日逼りてその生支を截らしむ。幾もなくしてこれを悔み、春僮を化して松樹と爲せり。云ふ。想ふに春僮は、春夏の候萬緑を以て大地を文飾する草木を表したるものにして、その松樹に化せられしは、秋末に至りて大抵黃落する植物の中、獨り松樹の後凋を以て常緑の色を變ぜざるに喩へしものゝ如し。

空間アキアは藝術の製作に上れること稀なり。通常その持物を銅鼓とす。



像 空のナルユミス 圖三十八第

形の峩冠を戴けり。

「ワチカン」の列品中  
 空間の神座に御せ  
 る像あり。又小亞細  
 亞スミニルナSmyrna同名の  
 在爾港により出でたる  
 陶製の浮彫に空間  
 の像第三圖あり。王座  
 に御して獅子を戯  
 れしむ。英國聚珍館  
 には空間の一像首  
 あり。美貌にして城

酒聖 Bacchus, Dionysus

酒聖は希臘人、羅馬人共にこれを葡萄酒及葡萄園の神と爲し、一層廣義の神性に於いては、秋收の天與を表す。蓋し自然の能作能生力の擬人にして、穀女の田野の果穀を掌ごると相並びて、酒聖は樹木の果實を成熟せしめ、以て人間の所用に供し、殊に葡萄の豊饒を賜與する神たり。而のみならず、酒聖は又開明文化及政治上諸事の整備せる秩序を人間に教へ、以て社會の幸福を増進せりと云ふ。こゝを以てこれを觀るに、酒聖の信仰は實に農業の大女神穀女の理想を補へるものにして、その古代宗教に於いて頗る重要なりしは固よりその處なり。希臘羅馬の民皆深くこれに歸依し、その神廟及祭節の甚だ多かりしも亦宜なり。而して酒聖の性格は獨りこれに止

まらず。他の一面に於いて、大いに日光アホロギンと觸接する所あるを見る。所以者何と云ふに、酒聖シウセイは酒の醸造と愛用との神なるよりして、歡樂親交の快味を人間に賦與する者と想はれ、從ひて酣宴に關聯する音樂の神なりと信ぜられたればなり。さればこの神性に於いて、酒聖は更に藝文女天の友朋乃至上首として、日光アホロギンと共に並び尊ばる。而して酒聖シウセイは又諸々の神來の原として信ぜられ、殊に戯曲の上に重ぜられき。

話説の傳ふる所に依るに、テベスは酒聖シウセイの降誕地にして、最勝の天神ツクニノカミ天父アメノチの戀愛もて著名なる酒聖シウセイの母春野ハルノは、即ちテベス王カドモスの女にして協和ハルモトの生む所なり。而して天父アメノチの甚寵は却りて春野ハルノをして慘死せしむる因ハルモトと爲りき。天父アメノチの春野ハルノを愛するや、酷妬クニヤの天妃アメノメは深くこれを憤りて、殘虐なる謀計を案じ、化して春野ハルノの老乳母

の姿と爲りて春野ハルノの許に至り、忠實を装ひて天父アメノチの愛情に對する疑念を鼓舞し、欺き唆かしてこれに勸むるに、まづ己の希望する所のものを充たさむことを天父アメノチに誓はしめ、その果してこれを行ふや否やを以て、愛情の眞偽を試みることを以てす。春野ハルノはその乳母の己が戀愛の仇敵たる天妃アメノメの化身なることを覺らずして、輒ちこれを信じ、その忠言に従ひて、天父アメノチに求むるに莊嚴満分の神相もて一たび己に見えむことを以てす。天父アメノチは切にその希望の愚なることを諭して、これを憐めしめむと努めたれど、春野ハルノは啻に懷疑を増すのみにして、頑として要求を固守せり。天父アメノチは止むことを得ずしてこれを容れ、即ち最勝の相を示し、赫々たる電光を放ちてその前に現ず。こゝに於いて不幸なる春野ハルノはその光焰の爲に忽ち焼かれて灰に爲れり。時に春野ハルノは既に天父アメノチに依りて身めるあり。その胎内

に在りて未だ生まれざりし嬰兒は、幸にして大地のこれを庇護せむが爲に、常春藤をカドモス王の宮殿の柱楹に纏はしめしを以て、死せざることを得たりしかば、ソエラス天父はこれを取りて直ちに己の膀肉の裡に容れ、保持するここ多時にして、月満ちてこれを産み、やがて使神をしてニッサの神婢に致して保育せしむ。即ち酒聖なり。この復生の故に、ディリヤ兩母 Director 又は再出 Abuparbo Dithyrambus の綽號を以て酒聖を呼ぶことあり。かゝる不可思議の事實は、恐らくは「アアリヤ」民族最古の傳説より出でしものならむ。梵語學者は蘇摩印度のの生誕に似たることを説く。蘇摩はその初め灌禮に用ゐる蘇摩花花悦意の液汁の人化にして、神人の介者たり。又毗那エネナ Vena と稱せらる。この語は愛着の義にして、印度より西方に傳はり、希臘に在りては變じて葡萄の液汁 Oivov, wine と爲れるものゝ如し。蘇摩の火より生れたるは、酒聖の雷

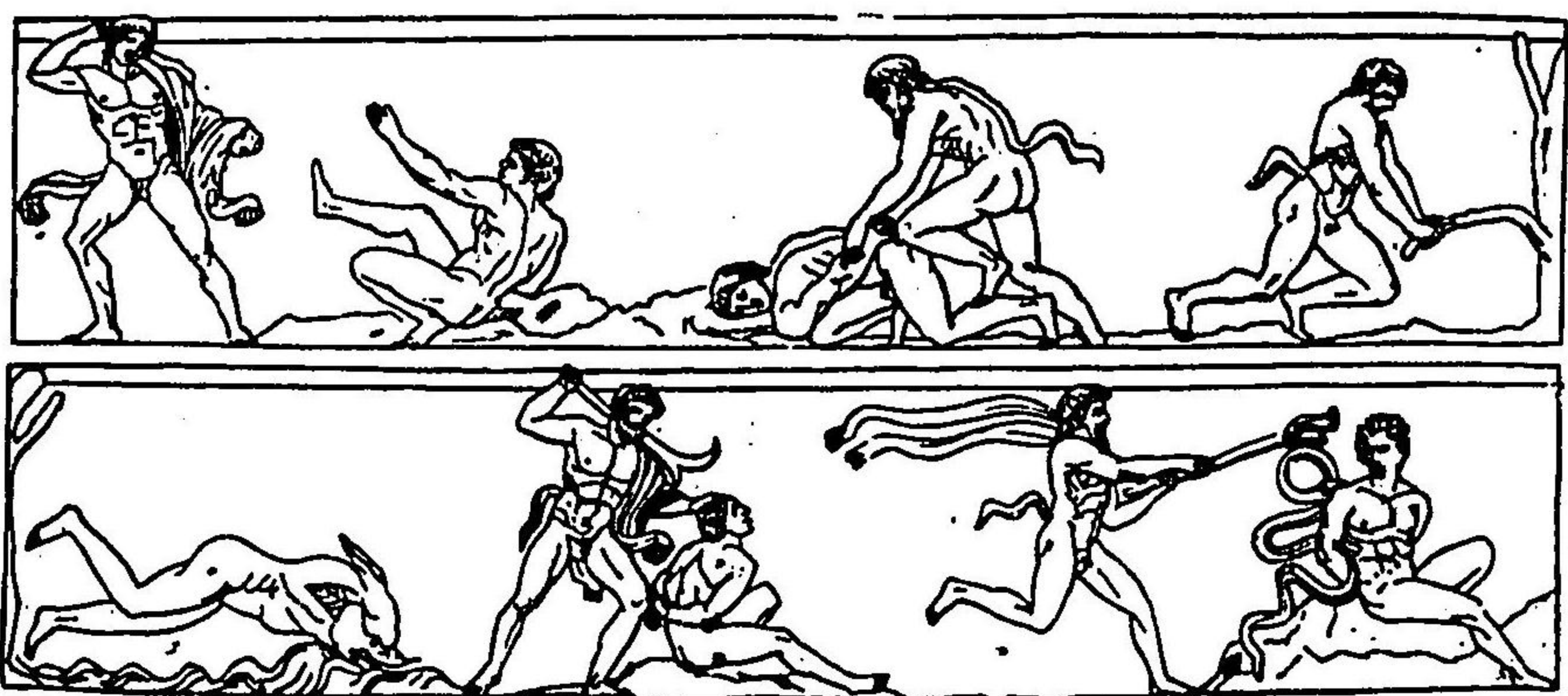
電に撃たれたる母胎より生まれたるに同じく、又蘇摩の帝釋天の膀に入れられたるも、酒聖の天父に於けるに似たり。然れどもこの比較は未だ以て神傳の基く所の觀念を解釋するに足らず。想ふに酒聖の生誕の傳説は、その由りて來る所明かなり。地の冬間の寂睡を出づるに方り、天の作用を受けて生々の氣を發し、春芽は葡萄の枝に生じ、その實漸く結びて神形將に成らむとするに至るや、孟夏の早熱地を灼きて、綠葉の深くこれを庇覆するに非ざれば、未だ成熟せざる實は殆ど枯死せむとす。こゝに於いて天は給養の力なき燥土に代りて保育の事を了せむが爲に、これを裏むに濕雲を以てし、これを養ふに膏雨を以てし、終に幼神をして成長を遂げしむるなり。酒聖を養育したるニッサの神婢の一人の濕女ヒメテス と名づけらるゝが如きも、亦雨露の果實を養ふことを表するに外ならず。後

代の話説は春野の同胞白鷗を以て、又酒聖の乳母を爲せり。ニユサの地はその處を詳にせず。これに同じき地名は一にして、足らず。啻に希臘のみならず、葡萄を栽培したる小亞細亞、亞刺比亞等にも亦これあり。されど恐らくはトラケエのバンガイオス山 *Paros* の地方ならむと想定せらる。酒聖は幽僻なる森林の中に人々を爲り、常に野獸と闘ひてみづからその力を強くし、後葡萄を植え、終にその液汁を搾りてこれを飲み、その徒と共に酩酊せり。その後常に月桂又は常春藤の冠を被り、許多の神婢、羊脚人及風響族 *Pygmaei* 等の一群に扈從せられて、山中に逍遙し、その狂信なる仕徒の歡喜の笑聲は、高く林間に反響せり。又古傳に従ふに、酒聖を教育せしは風響 *Pygmaei* の子羊脚老 *Stilpnos* なり。而して酒聖はその師羊脚老及爾餘の部從と共に、廣く地上の民に葡萄の栽培を教へ、又己の歸依を弘めむが爲に世

界を周れり。されど酒聖は啻に葡萄の栽培を傳へしのみならず、到處民をして都邑を建てしめ、又開明の俗、生活の樂、及社交の法を教へたるを以て、實に人間の恩主と仰がるゝに至れり。若しその恩賚を嫌ふが如き者あれば、酒聖の忿怒は恐るべき結果を致す。たごへばテベス王ペンテウス *Pentheus Cadmos* の母アガエ *Agave* の話説の如し。アガエは酒聖を歓迎することを嫌へるを以て、その神罰としてテベスの女人は狂を爲り、ペンテウス王を誤りて野猪を爲し、これを殺して寸斷せりと云ふ。

酒聖の力の驚くべき話説中最も著れたるは、チニルレニヤ *Tyrrhenia* 地 以太利、Sardinia 及 Sicily と東 の海賊の神罰に關するナクソス島の所傳なり。酒聖のイカリヤ島 *Icaria*、海中の一島 よりナクソス島に行くや、海賊は以て尋常の一少年と爲し、以太利に伴ひて奴隸に賣らむと欲し、酒聖を縛

す。須臾にして海水變じて美酒と爲り、酒聖の一たび點頭するや、鎖は忽ち切れて盡くその四肢より落ち、一の恐ろしき熊ありて艦端を見えしと思ふ間に、酒聖は獅子と爲りて咆吼し、葡萄及常春藤の蔓は、何處ともなく生え來りて檣帆を纏ひ、既にして舟は神婢の摧破する所と爲りぬ。海賊はその不思議の神變に怖れ、皆狼狽して舷外に跳り出で、海に入りて海豚に化せらる。獨りこの舟の嚮導者は、初め酒聖を縛するこゝを止めし故を以て、死せざるこゝを得たりと云ふ。この光景を表出せる浮彫の佳作第八十は、今なほ雅典のリニシクラテエスLyceum酒聖祭の**雅典の富豪にして俗人團の長たり、の記念標**紀元前三百三十四五年の建式築にして「コリント」柱に現存し、圖中酒聖の平然として獅子と戯るゝ形を出せり。この種の話説は、その由りて來る所蓋し飲酒の興奮に在り。酒の効果は人の心情と筋肉とを激し、時として人間に有るまじ



影浮の變神聖酒の典雅 圖四十八第

き暴力を演ぜしむ。こゝを以て酒聖は一面ヘラクレスの如き怪力の神たり。巨人戦の時に方りては、大いにフレグラの野に戦ひて、巨人等を殪せしこと前に述ぶるが如く、又ヘラクレスの如く冥界に行き、その母春野を奪ひて天界に伴へり。春野はその後酒聖の伴侶と爲りぬ。酒聖は既に怪力の神たるよりして、又變形を能くする神性を賦せられ、而も最も猛烈なる



獅子、牛又は多頭の龍等に現ずることあり。故に又牛相 Ταυρομορφος の名あり。蓋し亦酒の効果たる暴勇の寧ろ獸性に近きより來れるならむ。

酒聖の崇拜の本地たるナクソス島には、又一の有名なる話説あり。クレテエ島の王ミノス Minos の女春陽 Αρσινόη と酒聖との結婚これなり。アッチカの英雄テエセウスは、春陽の策に依りて迷樓 Λαβύρινθος の危険を免れ、能く妖怪を退治せし後、春陽と婚せむが爲に、これを伴ひてクレテエの島を出で、遂にナクソスに次し、春陽の眠れるに乗じてこれを捨て去れり。そのテエセウスの無情に出でしや、夢感の神告に由りしやは明ならず。春陽はその適歸する所を知らず、悲傷と恐怖とは譬ふるに物なかりき。偶々酒聖の印度より歸り來りて、こゝを過ぐるに會ふ。春陽の意外の嬉しさは復狀すべからずして、

直ちに酒聖の妃と爲れりと云ふ。この話説は、ナクソス島の所傳とテエセウスに關する雅典の神傳との混合せしものゝ如し。オヂュッセルに依るに、オヂュッセル冥界に行ける時、フェドラ及プロクリス Πρόκρη 王の女 Πρόκρη、Cephalus の妻 等の傍に、美貌の春陽を見たり。これテエセウスの雅典に歸る時、春陽をクレテエ島より伴ひたれども、未だこれと婚せざるに先だちて、チアの古名 Δία Νάξος の島に於いて獵女の爲に殺されたればなり。獵女の春陽を殺せるは、その事頗る解し難し。雖も、酒聖の囑に依りて、テエセウスより奪はむが爲なりと云ふ。テエセウスの愛したる春陽は、一旦死してその墳墓をチア島に留むと雖も、酒聖の妃と爲りて神化せる春陽は、その良人と共にオリュムポス神宮に一座を得たり。然れども後代に至りては、前に述べたる話説最も通途に行はる。春陽の原名アリアドネエは優美と歡喜との

感を表せり。蓋し陽春の自然を人化せるものに外ならず。地に死して天に蘇し、眠りて又醒め、テエセウスの爲に不幸の女子たり。雖も、**酒聖**の爲に最愛の戀人たり。話説の大體稍**植女**の誘拐に似たるを見る。或は曰く、**春陽**は後に死せるを以て**酒聖**は曾てこれに與へし七星の冠を星宿に化せり。と。雅典に於いては、收穫に對する報謝の一祭典ありて、**酒聖**及**春陽**の爲に舉行せられ、嚴格なる行列を以て葡萄を擔ひ、全市の街衢を過ぐるを常とせり。

**酒聖**の歸依は昔に希臘全土に遍かりしのみならず。又以太利、小亞細亞、トラケエ、及マケドオニヤMacedonia人の住せる國及到る處、希臘人に依りて葡萄の栽植せられたる地に行はれき。**酒聖**は一に**ヂオニユス** Dionysus と稱せらる。ヂオは神の義にして、ニユスはニユサの地名より來れるなり。又一に**掃憂** Lybros、**歡呼** Enthousiasmus、又

は**譟叫** Bolus と稱せられ、別に又**酣飲** Ichneutes の秘名あり。**掃憂**は**酒聖**の能く人をして快樂ならしむる徳に名づく。蓋し**酩酊**の象徴なり。**搾酒**の名は葡萄酒の創製より來る。**酣飲**は**鯨飲**歡呼の神として**酒聖**を表する名なり。されば**酒聖**の祭節は頗る秩序を闕く。雖も、實に通國の民俗にして、普く舉行せられたり。その冬至の祭節は悲痛を表す。これ即ち葡萄のこの候に及びて肅殺の氣に遇ひ、烈冬の惡神に虐げられ、たゞ江海と下界とに頼りて纔に死を免るゝものなり。と信ぜられしが爲なり。故にこの祭節に當りては、民は皆**酒聖**の受苦を分たむことを冀ひ、さまざまの粗野なる言動を以て、この神の隱没に對する悲傷を表するを常とせり。又女子のみにて行ふ冬の祭典あり。これに反して、始めて新酒を試みる春初の祭節は、専ら歡喜の性を具ふ。これ自然界の駘蕩の候に遇ひて再たび榮ゆるを以

て、限りなき喜びを激しき樂みをもて祝するなり。これを酒聖の

春祭 *Anthesteria* と云ふ。

酒聖の春祭は、古のアツチカ曆の第八月Anthesterionの十一日  
より十三日に至る三日間、雅典を主として舉行せらる。希臘人はこ  
れを以て酒聖の下界より還り來る時なりと信じたるなり。その初  
日を開槽日 *Phloigia* と云ひ、始めて客秋醸造したる新酒の槽を開く。次  
の日を盃盤日 *Khos* と云ふ。この日盛大なる行列及大饗宴あり。客は皆  
花冠を着け、且奴隸に許すに許多の自由を以てすること、猶羅馬の  
收穫 *Saturnus* の祭日の如し。暴飲亂舞の裡、有らゆる諧謔及惡作の嬉戲  
を肆にし、祭儀の行列に加ふるに、劇部の演技を以てして、終日斷ゆ  
ることなかりき。最終の日を壺瓶日 *Chytus* と名づく。諸々の果蔬蔬菜  
を煮、壺瓶に盛りてこれを列ぶるが故なり。希臘人はこの日死者の

靈上界に來ると信じ、爲にこの奠を布くなりき。

春祭に先だちて搾酒祭 *Arctia* あり。アツチカ曆の第七月 *Arction* の一月後半及二

月の前半に當る。雅典に舉行せらる。口碑に従へば、搾酒のこの地を以て濫觴

とするが故なりと云ふ。雅典に酒聖の二大神廟ありて、その一を搾

酒廟 *Arctia* とす。この祭節には大饗宴ありて、その飲食は雅典市より

供給せられ、蹠跚舞踊して自由に歡樂し、又有らゆる諧謔及惡作劇

を行ふことを制せざりき。

最も盛なる酒聖の祭典 *Dionysia* は、アツチカ曆の第九月 *Dionysia* の三月の後半及

四月の前半に當る。又雅典に行はる。これ即ち雅典人の本義の春祭にして、非常

の盛大を極め、諸酒聖祭中最も盛なるものとす。大酒聖祭又は市酒

聖祭と稱するものこれなり。四方より集まり來る群衆の大會合あ

りて、數日の間祭節に狂し、雅典全市の民は、皆有らゆる異様の奇裝

を爲して、諸々の滑稽を演じ、その巧妙なる考案と精練なる藝術上の好尚とは、これが爲に極めて當時に著名なりき。祭儀の主相は、酒聖の古木像の行像と共に、嚴格なる行列を以て街衢を通過することなりき。又これに伴ひて種々の競争、盛大なる饗宴、假面舞の滑稽行列、悲壯又は滑稽の新作曲の大演伎等あり。最終の日には競争に勝てる者に賞品を贈與せり。

小酒聖祭又村酒聖祭と稱するは、アツチカ曆の第六月Monday, Poseidon.の十二月後半今に當るに行はる。こはアツチカ村民の本祭にして、即ち葡萄收穫の終期とす。その既に冬に入れるは、葡萄をして久しく樹上に懸からしむるを好むが故なり。この祭節は最も古俗を存じたるものにして、行列は初めに酒瓶、次に葡萄の枝、犠牲に供する牡山羊、及無花果を盛れる籠あり。最後に摸造の生支を擔ふ、質朴粗野なる鄙俗の嬉

戲、假面舞及暴飲の饗宴を行ひ、青年は屠りたる山羊の皮もて革囊を作り、これに塗るに脂油を以てし、以てその上に亂舞す。而して毎戸の家族は相伴ひて神祠に詣で、以て幸福を禱る。一行の中、少女を先だてゝ靈籃を持たしめ、次に奴隸をして又摸造生支を擔はしめ、家長は生支の歌を唱ひてこれに殿するを常とす。酒聖と生支との關係は、豊饒及生産の義に存するなり。レスポス島Lesbos, Egean Sea 中の一にに於いて陽神Heliosの異名ありしも、亦同義なるべし。

以太利に於いてもその俗はほゞ希臘と同じく、掃憂Libera又は掃憂父Liberalisの名を以て酒聖を呼び、三月十七日祭典Liberalisを行へり。その俗頗るアツチカの酒聖祭に似て、特に僻鄙の風あり。樹皮もて作れる假面を着け、種々滑稽の戲を演じて以て相樂む。古くはたゞ無邪氣の祭典にして、耽飲亂醉の風なかりしが、後希臘秘教の風を傳へ、終

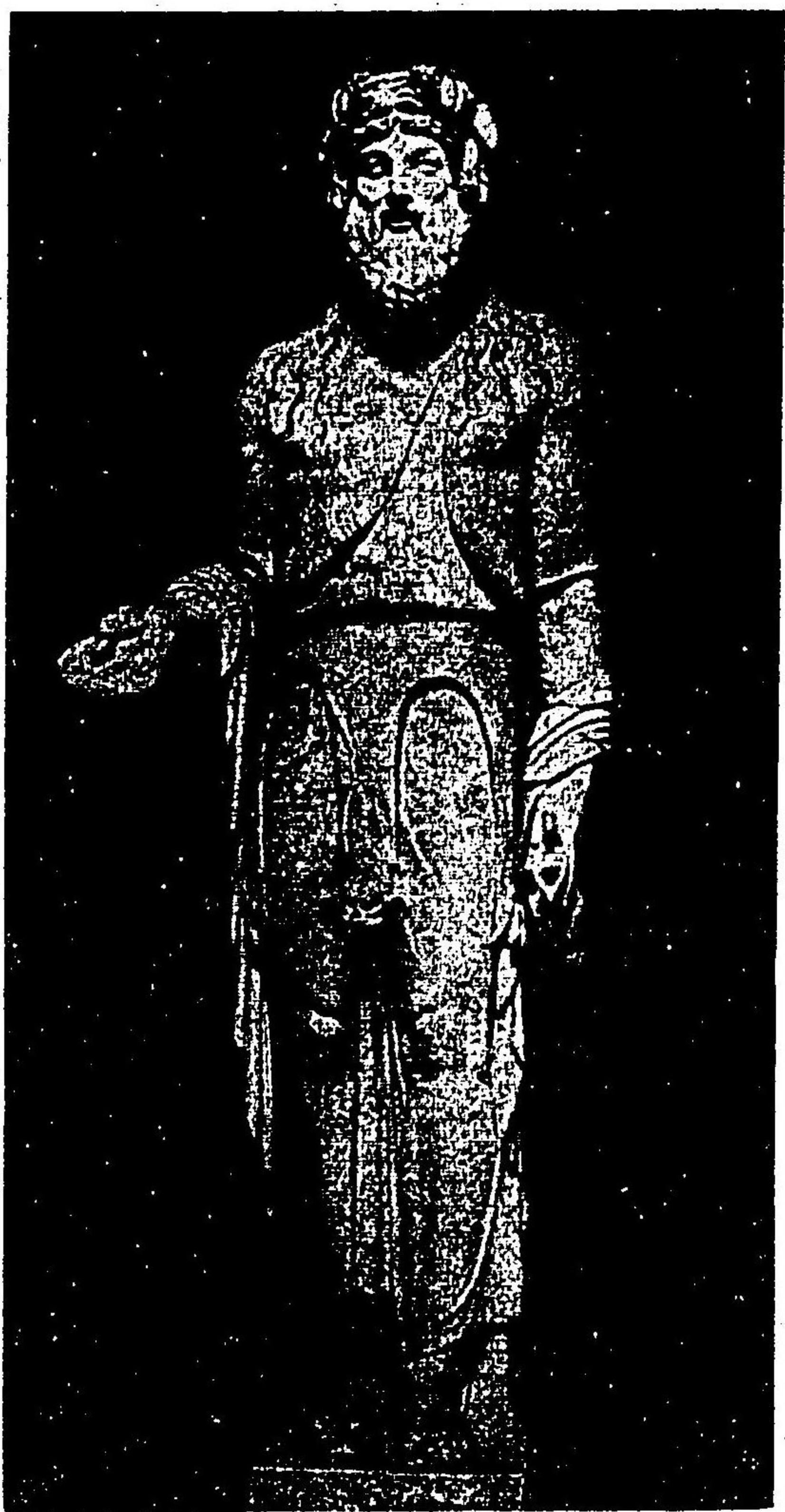
に有司の峻嚴なる關涉と雖も、これを壓滅すること能はざるに至れり。

酒聖の藝術上表出は無數の遺物を今に傳ふ。古代の製作に在りては、概して嚴格沈毅の相貌を以て、有髯の男子に表せられたり。ワチカンのサルダナパロス Sardanapalos, Assyria 古王の如きを稱する酒聖像 第五十八圖 及ミユン



圖五十八第  
像聖酒のンカナヲ

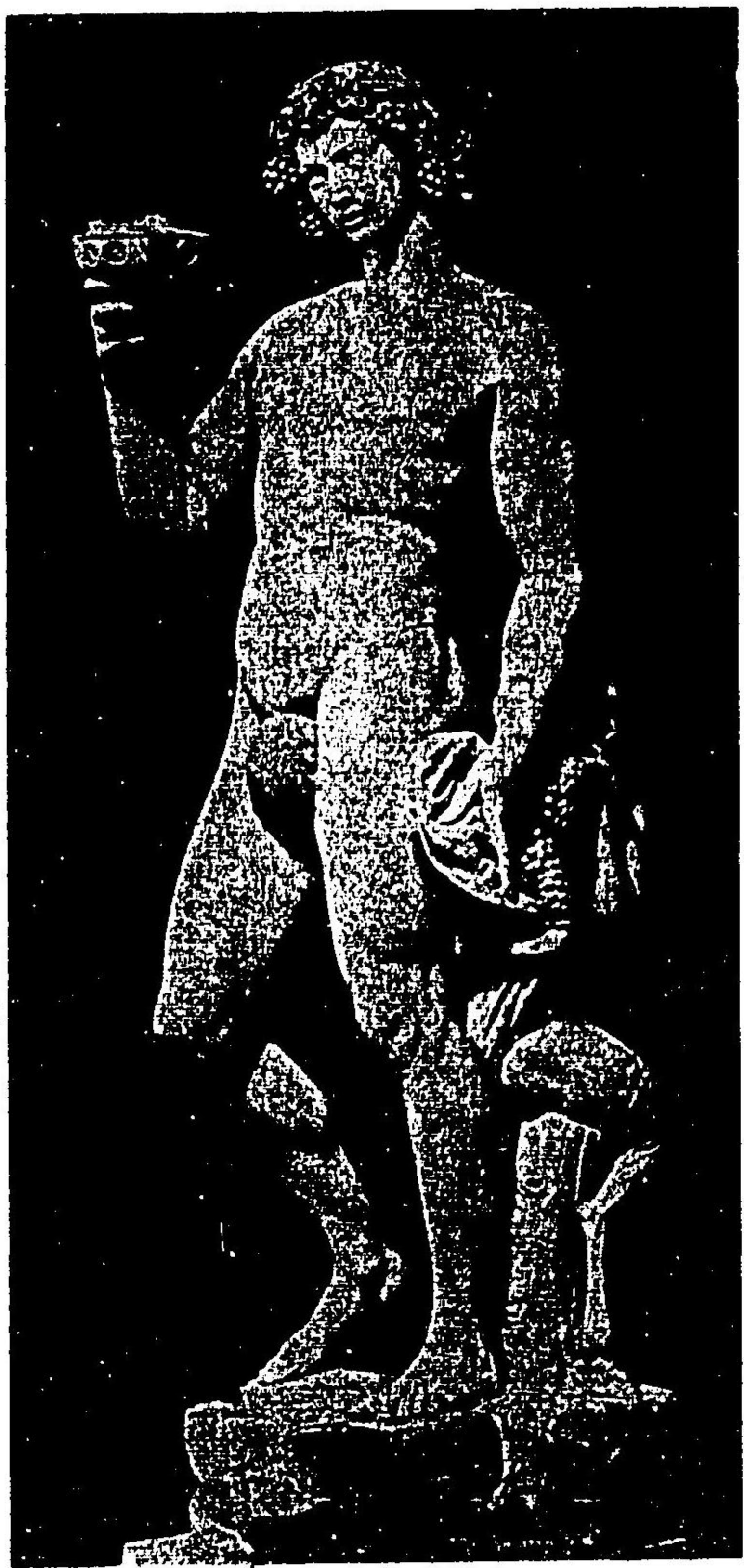
ヘン彫塑館の酒聖像 第六十八圖 の如きは、その適例なり。全身衣を纏ひて



像聖酒のンヘンユミ 圖六十八第

頗る威儀を具ふ。英國聚珍館の酒聖の首は、多くはこの式に屬す。後漸く青年に作られ、豊麗優美の形相と爲れり。その面相頗る女子に近く、輕快婉曲の姿勢にして、圓滿なる支體に作らるゝを以て、一見前者と區別すべし。

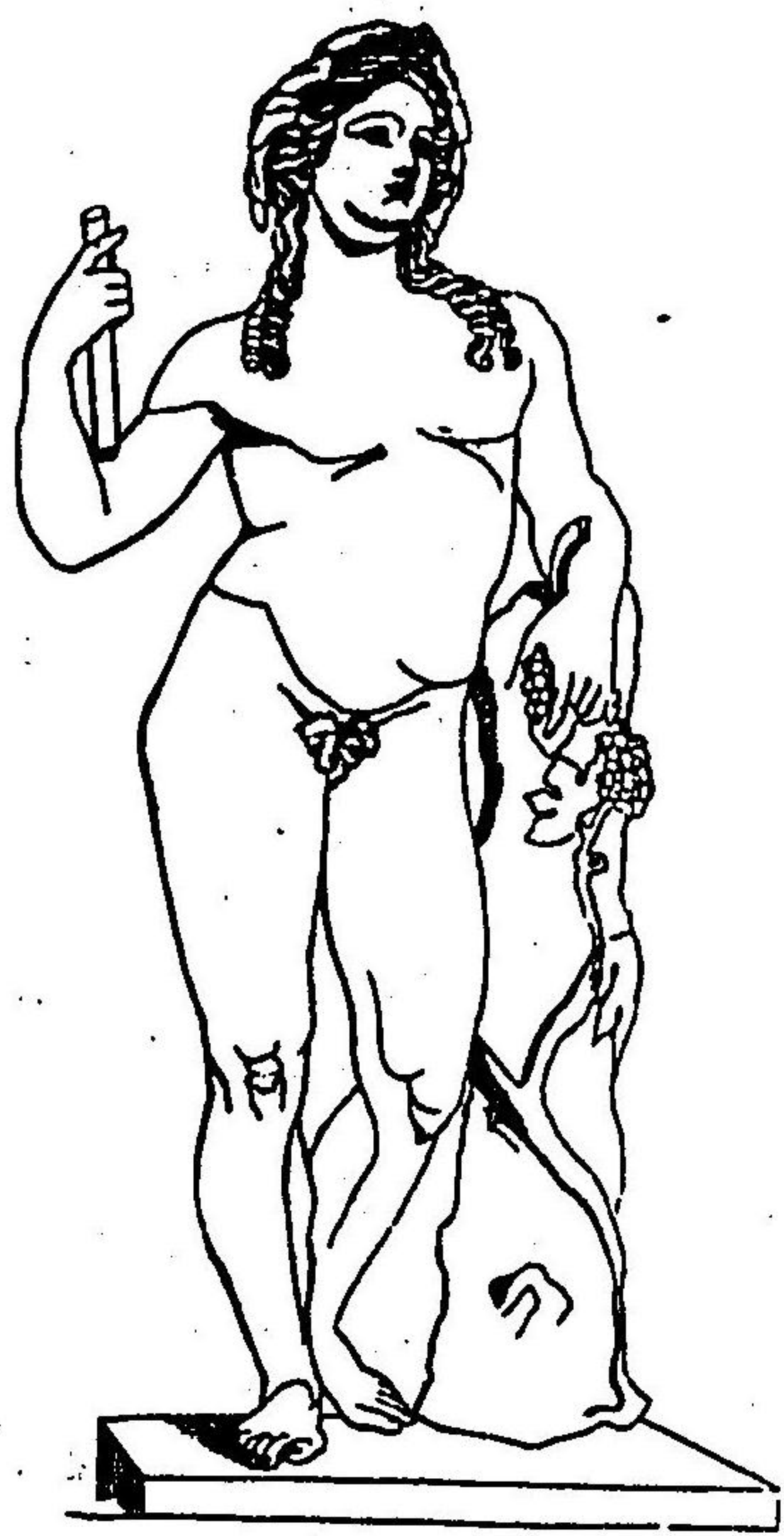
フィレンツェ 聚珍館の酒聖バックスと羊脚人オウロの像第七十八及「ルウウル」の年



第七十八圖  
人脚羊及聖酒のエツンレイフ

若き酒聖像第八十の如きは、共に後代の理想の典型なり。ワチカンにもこれに似たる像あり、共に裸體にして、手に葡萄又は酒盃を執れり。この式に屬するものは、多くは皆裸體像とす。英國聚珍館の酒聖

と葡萄Ampeles及陶製の酒聖バックスと風響等皆これなり。後者は葡萄を人化



第八十八圖  
ルウウルの酒聖像

べし。その垂髪は捲縮の形甚だ豊艶にして肩に懸り、葡萄及常春藤の冠と共に編まれたり。かゝる頭髪は往々酒聖の一特相として、上述の諸像中多くこれを見る。殊に「ワチカン」の像及葡萄と酒聖との像の如きは、冠中に葡萄の實を交へたり。「カピトオル」の酒聖の首も亦最も優美なるものゝ一とす。

酒聖の持物は酒神節、葡萄及常春藤の冠、胸邊に垂るゝ獸皮、手に把れる酒盃等なり。酒神節は投槍の一種にして、葡萄または常春藤を



第九十八圖 希臘浮彫酒聖像

纏ひ、上に松子を着く。酒聖圖第八十九圖に見るべし。古希臘の俗、松の一種より得たる油もて、酒に香氣を賦したるに原づけり。この法今も尙小亞細亞に存す。云ふ獸皮は或は全身に纏へるものあり。酒聖は常に獅子、虎及豹を伴ふ。豐饒の象徴として、牡牛及牡羊も亦酒聖の愛獸たり。後常にこの神に供する犠牲と爲りぬ。植物に在りては葡萄及常春藤の外、神來の標幟として、この神の爲に神聖なる月桂あり。酒聖の信仰にも祕密の教法行はれき。古代の遺物中間、これを見る。ナポリ聚珍館に藏する一浮彫第九にこれを現したるものあり。圖中の人物は酒聖の巫祝にして、その中の一人は鮮しき羊皮を被れり。

酒聖の話説に關する諸人物中、彫塑家の往々製作したるは春陽なり。その古作の最も著名なるは、ワチカンに藏せらるゝ睡相の像第十一



圖十九第

圖一十九第 圖一十九第 圖一十九第





像彫書作ルケツネンダ 圖二十九第

■にして、大いさ等身に越えたる極美の大理石彫なり。近古の彫塑家の製作にして最も盛名を博したるは、ダンネツケル Dannecker の傑作<sup>第九十</sup>とす。テエセウスの新婦としてこれを表し、裸體にして豹背に乗る。今

フランクフルト Frankfurt am Main に在り。

羊脚人 Satyrus, Satyrus, 羊脚人 Satyrus, 羊脚人 Satyrus

自然の生命の女性擬人たる神婢と相對して、樹林、流水等の男性劣

位諸神あり。即ち羊脚人<sup>Satyrus</sup>、羊脚老族<sup>Satyriades</sup>、及風響族<sup>Satyriades</sup>とす。この三者の區別を明かにすることは頗る難し。蓋し樹林、山谷の精は、羊脚人を以

てその本領とし、酒聖<sup>酒聖</sup>の列群も亦羊脚人を主とす。故に羊脚人は酒

聖と離るべからざる關係あり。悪戯の粗暴放縱は羊脚人の性格の

特色とす。その獸性の嗜好は、おのづからその形相をして半人半獸

なりと想像せられしむるに至れり。初め長く尖れる耳と山羊の尾

との外、皆人形を賦せられしが、後兩脚も亦山羊に化せられたり。鼻

低くして、鼻覺鋭く、面相野卑にして、頭髮粗硬なり。而も藝文、女天の

如く音楽、舞蹈を好む。その樂器は簫<sup>Syrinx</sup>、笛<sup>Flute</sup>、銅鈸<sup>Cymbalum</sup>、Cymbal 及四つ

竹<sup>Castanea</sup>等なり。羊脚人は酒を好むこと又酒聖の如く、亂飲に耽りて

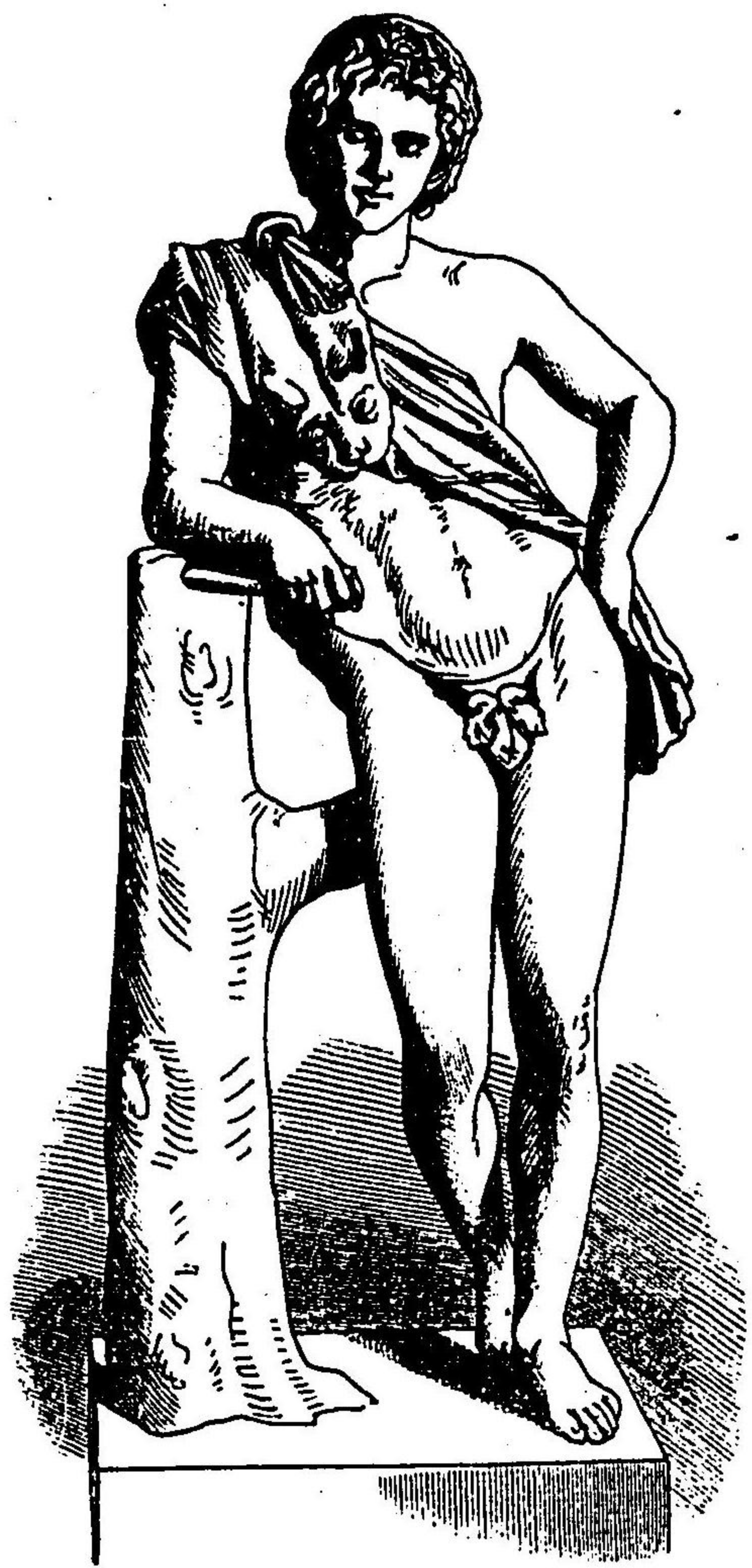
常に泥酔すと雖も、心情の歡喜興奮を起すは、たゞ酒聖のみにして、

羊脚人の飲酒の効果は、純ら肉體の上に止まり、相待ちて以て有ら

希羅羅馬諸神傳卷第四

ゆる狂態醜惡の嬉戯を演ずと云ふ。古の人はかゝる怪神實に山中に住すご想ひ、基督紀元の頃までこれを信ぜり。シユルラの傳中、エピロスの山中に於いて眠れる羊脚人を發見せしことあり。その形相は技術家の表出せしものゝ如く、シユルラこれと會話を試みしかども言語通ぜず、その聲殆ど馬又は羊の如し。シユルラは恐れてこれを放てりご云ふ。

羊脚人は古代藝術家の爲に多少その製作に上されたり。その形相の典型は、賤むべき半人半獸の理想に原づき、詩賦に於いても畫彫に於いても、前に述べたる所を以てその通相ご爲し特徴と爲す。或は往々堅勢の形相に表出するごごあり。酒聖祭の生支と同様の觀念より出でたるなり。額に纏へる紐及常春藤の冠は、通じて酒神の表章として、又羊脚人の着くる所たり。遺品中最も美なるものゝ一は、カピトオル聚珍館の像第三圖九なり。こは古代の典型にして全く



像人脚羊の館珍聚レオトピカ 圖三十九第

青年の人形なり。その肩に獸皮を纏ふ。又同館に葡萄を食ふ羊脚人第九十圖あり。右手に葡萄を把り、左手に曲杖を持ち、傍に羊ご籜ごあり。シユンヘン彫塑館には羊脚人の胸像あり。面相野卑にして一種の



人脚羊の掘發ムウニラクルへ 圖五十九第

表情を有す、ヘルクラニウムの發掘品に一醉銅像第五圖あり。又一古浮彫に羊脚人の葡萄を搾る圖第六圖あり。その足下の累々たるものは即ち葡萄にして、二羊脚人は互に環を牽いてこれを踏めり。



像人脚羊のレオトピカ 圖四十九第



圖六十九第 古浮影羊脚人圖

羊脚老 *Molybd. Silenus*

羊脚老は通途の傳説に從ふにも、風響の子にして、羊脚人中最も古い且最も著名なる者なり。酒聖を保育し、後その忠實なる臣僕と爲る。詩家はこれを描くに、鼻覺の鋭き鼻、禿げたる頭、及多毛なる胸と脚とを以て

し、又その胃甚だ大にして、歩むに苦しむ老者なりと爲す。毎に驢に騎して酒神の群前に行き、左右に羊脚人ありてその半酔の體を支ふと云ふ。

古代の藝術家は屢々羊脚老を作れり。ルウウルの羊脚老第九十は酒



老脚羊のルウウル 圖七十九第

聖の教養者としてこれを現したり、裸體にして兩手に幼兒を抱き、

切愛の瞻視もてこれを眺め、毫も滑稽の相を帯びざる善性の老夫  
なり。頭に常春藤の冠を着く。ミューンヘンの等身大理石像第九十は、左



第九十八圖 羊脚老の像

手に盃を把り、右手に  
革の酒囊を持ちて、將  
にこれを飲まむとせ  
り。常春藤の冠を着け  
たること前に同じ。又  
英國聚珍館に酔ひて  
横はれる羊脚老の像

あり。酒囊及常春藤の冠は即ち羊脚老の持物にして、又餘の酒神の  
く酒神節を持つことあり。酒聖を育てたる著名の羊脚老の外羊  
脚老族Sileniの一群あり。こは凡べて羊脚人の老いたるものを指す

か。或は別に涌泉流水を掌ごる特殊の神族と立つるか、その差別甚  
だ明かならず。羊脚老族の中、酒聖の話説の一部を演じたるマルシ

ユアスMaorjak, Marjyasあり。マルシユアスは羊脚人の如く、吹笛の名手なりし

が、深くその技に慢じて、吹奏の競争を日光に挑み、負けたる者はそ  
の身命を勝てる者の意に任せむことを約せり。競争は終に日光の

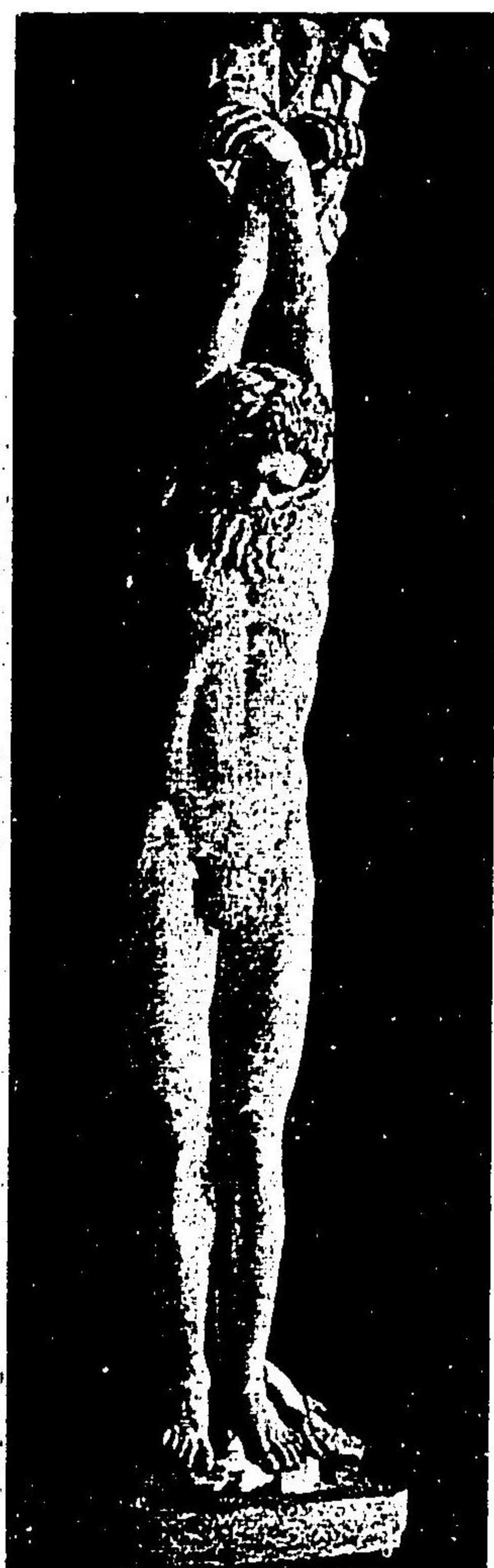
勝に歸せしかば、日光はその約を酷用し、マルシユアスを縛りて松

樹に懸け、生きながらその皮を剥きたり云ふ。フィレンツエのマ  
ルシユアスの像第九十はこれを表出したるものなり。ラテランのマ

ルシユアス第九十は四つ竹を把りてこれを鳴らす。こは近代の修補  
にして、もと武女の笛を創製してこれを吹くに方り、その醜容を染

僅に笑はれたるを以て、これを捨てたるを拾へるなり云ふ。ミユ

ロンMyron, 希臘の彫家、紀元前四  
百五十年頃をその盛時とするの所作の摸品なりと稱す。マルシユアスは



圖九十九第

スアエシルマのエツンレイフ

スアエシルマのソラテラ 圖百第



元小亞細亞フリユギヤの神にして、後希臘に傳はれるものなり。そ

の特長とする所の笛も亦フリユギヤの樂器にして、初め希臘に於

いては擯斥せられしが、後アルゴスの人サツカダス Stachadas 吹奏の譜

を作りて、デルフアイの日光祭の競樂に勝利を得てより、漸く用ゐ

らるゝに至れり。日光アポロとマルシユアスアポロとの競争の話説は、蓋し笛の

會て希臘に行はれざりしことを表するものならむ。プラトオン Platon

ソクラテスの會てその師ソクラテス Socrates 人、凡そ紀元前四

七百年に生まれ、八十一歳にして歿す。の會てその師ソクラテス Socrates 人、凡そ紀元前四

百六十九年に生まれ、をマルシユアスに比したるは、その言説の能く人を

悦可せしむるを以て、この神の音樂の靈感に喩へつるなり。

ミダスも又往々羊脚老族の一人に數へらると雖も、實はフリユギ

ヤの神傳上創建者にして、マケドオニヤより移住せしなり。或は曰

く、フリユギヤのゴルチオム Gordion の王ゴルチオス Gordios の子なり

とされど通途の話説は、ミダスを以て空間の子若くは寵人として爲して、空間はこれに饒多なる財寶を與へたりと云ふ。ミダスは既に財寶に富めり。雖も富むに従ひて愈々その慾を増すこと猶常人の如く、更に黄金を渴望し、終に却りて困厄を招くに至れり。一日羊脚老は酔ひて酒聖の群を逸し、ミダスの園に遊ぶ。ミダス欺待を極め、旬日の間、豪華の盛宴を以てこれを饗し、終に羊脚老に従ひて酒聖の許に至る。酒聖大いにこれを徳とし、ミダスに許すにその望む所の希願を充足せしめむことを以てす。ここに於いてミダスは酒聖に請ひて、己の觸るゝ所の物皆化して黄金と爲る靈力を得たり。飲食を欲してこれを手にし、或はこれを口に觸るれば、有らゆる物盡く黄金に化し、一もその飢渴を充たすこと能はずして、次第に死に瀕し、終に又酒聖に請ひて、この不幸の靈力を解脱する法を得、即ち

バクトロス河 Pactros, Tyche の一清流の水に浴して、始めて黄金の厄を免れたり。ミダスのこの河に浴するや、その足に觸れし所の砂早く化して黄金と爲り、バクトロス河は永くその底に金砂を布き、後世に至るまで能く金を産すと云ふ。この話説は、想ふに太陽の諸擬人法の一にして、その一たび出づるや、金色の光明を以て普く世界を照すが爲ならむ。又ミダスの日光 アポロンとマルシユアスとの音楽競奏の勝負を判ぜし話説あり。ミダスは勝をマルシユアスに歸せしかば、日光怒りてミダスの耳を驢耳に化せり。ミダス大いに耻ぢ、常に深帽 カリユを被りてこれを隠す。一日治髮の奴隷の見る所と爲り、これを祕密に附することを命ず。奴隷はこの奇事を知りて人に語らむ。欲すれども、王命に背くべからざるに苦み、終に地を掘りて穴を造り、これに向ひて王の驢耳なることを私語し、以て悶を遣りてこれを埋む。後

この處より蘆葦を生じて、風吹くごとに奴隸の語を反復し、王の祕密は世に顯れきと云ふ。後世ミダスの耳と云ふ語を以て謬判の義に用ゐるはこれが爲なり。

### 風響Πνεύμα

風響は極めて古き森林草野の神にして、初めたアルカヂヤ山地の住民及その他の牧羊の民族に尊ばれしのみなりき。既にしてその神性は益々廣く崇拜せられ、終に希臘民族の全部に普きに至りぬ。その原名「パン」は梵語の風又は風神を義とする「パワナ」Pavanaより來れるもの、如し、通途の話説はこれを使神の子とし、その曾てキレネエ山に於いて喙木Προκοπίαの牧畜を守れる時、喙木の一女なる神婢織女Πηνελόπηの生む所と爲す。風響の生まるゝや、全身毛ありて角

あるのみならず、その兩脚は即ち山羊の足にして、蹠跳嬉戲せるを以て、織女は大いに驚けり。父使神はこれを野兎の皮に裹みてオリユムポスに致す。天闕に集へる諸神はこの小樹神の形を見て、頗るその奇異を喜べり。云ふ。風響は太古よりアルカヂヤ地方に於いて、牧羊者の爲に、最も勇ましき保護者と信ぜられき。夜陰又は天候の悪しき時、牧羊者のその畜群と共に屏居する山中の洞窟は、風響の爲に神聖なる處にして、アルカヂヤの山にはこの種の洞窟甚だ多く、又ポイオチヤのバルナツソス山等にも、風響の洞窟少からず、而して、風響は極めて壯快活潑の性質にして、獵者として森林に逍遙することを好む神なり。と信ぜられ、従ひて牧羊者に次いで、獵夫もこれを尊崇せしのみならず、又漁夫及養蜂者の守護神と崇められき。



牧羊の神として、風響は又音楽を好み、ホメロス風の詩に依るに、  
風響は牧場より晚歸の途上、簫を吹いて行樂し、山谷神婢は諸神の  
頌歌を唱ひつゝ、これに伴ひて快活に舞ふを常とす。而して詩人は  
簫の創製に就いて荒唐なる話を構へ、風響の愛したる神婢、  
Phoinix Phoinix 云ふ者を作り出せり。風響は激情を以て、  
Phoinix Phoinix 簫女に逼りしかど、  
簫女はその情慾に應ぜずして、懷抱を道る。然れども、風響に追はれ  
て隠るゝに處なく、救を大地に求む。大地は終に、  
簫女を化して、蘆葦と爲す。こゝに於いて、風響はその蘆葦を取り、七管を結びて一の樂  
器を作り、神婢の名に因みてこれを簫と名づけ、後常にこれを弄び  
て、以てその情を遣れり。云ふ。而して、風響は音樂と共に、又深く舞  
を好む。ピンドロスの詩に従へば、風響は實に諸神中最も舞の妙手  
なりき。常に山谷神婢と相伴ひて群舞するを以て、無上の娛樂と爲

し。時に諧謔の跳躍もて、神婢等を悦ばしむ。その山羊の兩脚は殊に  
これに便なりきと云ふ。

風響は樹神として、又懸識の能あり。一説に依れば、日光これを風響  
に傳へたるなり。アルカヂヤのアカケシウム Acacium には、極めて古き  
風響の託宣ありき。

幽僻の山村及人跡疎き森林は、共に恐怖の感覺を以て、行旅の孤客  
を惱ますを常とす。その怖畏の事相は、往々不意に出で、その由り  
て來る所を解すべからざるもの多し。古の人はいかくの如き有らゆ  
る怖畏の悚然たる感覺を以て、皆風響の所爲に出づと爲し。これを  
風響の恐慄 Panics Panics 云ふ。而して、風響は又諸くの奇異なる音聲も  
て、旅客を驚愕せしむることを樂む。故に後代に至りてこれに原づ  
ける一話説起れり。天父の巨靈と戦ふや、風響はみづから創製した

る喇叭を吹き、不意の恐怖を以て巨靈を脅かし、以て天父の爲に好箇の助力を致したりと云ふ。然れどもこの話説は、蓋し巨人戦に於ける人魚の所爲の翻案に過ぎず。雅典の民は初め風響を信ぜざりしが、紀元前四百九十年波斯軍の雅典を攻むるや、雅典人はフィヂッピデエス *Phidippides* をスバルタに遣はして援けを求む。スバルタの俗、満月以前に國境を越ゆべからざるを以てして、これに應ぜず、フィヂッピデエスは使命を全うすること能はざりしと雖も、歸途アルカヂヤのバルテニオス山 *Parthenos* を越ゆるに方りて、風響の神託を得、これを祀らば、永く雅典に與ふるに大幸を以てせむことを傳へたり。果せる哉。その大いにマラトン *Marathon*、雅典の北東、東岸の一村に戦ふに當り、風響の神助に依りて、波斯軍は不意の恐怖に襲はれて敗れ去りぬ。これより後、雅典に於いても亦篤く尊崇せられ、高區の麓の洞窟に奉齋せられき。

以上叙する所は、古代の單純なる風響の性格なり。後漸く大母の徒なりと想はるゝに及び、酒神群中の地位を得て、自然の生産力の一象徴と爲り、その名の原義は殆ど喪失せられて、神格は大いに高まり、眞の神祇、諸物の創造者と崇めらるゝに至れり。風響の名はもと凄然たる微風の義にして、時に蘆荻を吹いて笛聲を發し、時に林中に鳴りて啾然たる鬼哭の如く、以て暮夜の行客を恐れしめたるものなり。

風響の一たび酒聖の群中に加はるや、詩家及造形藝術家は共に風響族 *Fanes* 及小風響等の群神を想像して、以て酒聖の列を成さしめ、終に羊脚人及羊脚老族と混同するに至れり。

風響の本祠はアルカヂヤのアカケシウムに在りき。牝牛及羊を犧

牲に供す。乳汁、蜂蜜及新酒も亦これに獻ぜられたり。  
 藝術に於いては、風響の像に新古の兩式あり。その古きものは希臘  
 藝術の最良時代に屬する典型にして、額に生えたる兩角又は長耳  
 の外、全く人間の形相に表せらる。後代の式に屬するものは、その角  
 更に長大にして山羊の長髯と兩脚をを加へたり。英國聚珍館の風



圖一百第  
 像響風の館珍英

響像一第圖百は古式に  
 屬し、羅馬ボルゲエ  
 ゼ莊の風響像二第圖百  
 は後代の式に屬す。  
 又同館の一浮彫に



圖二百第 像響風の莊セエゲルホ  
 圖三百第 畫壁響風の館珍聚リホナ



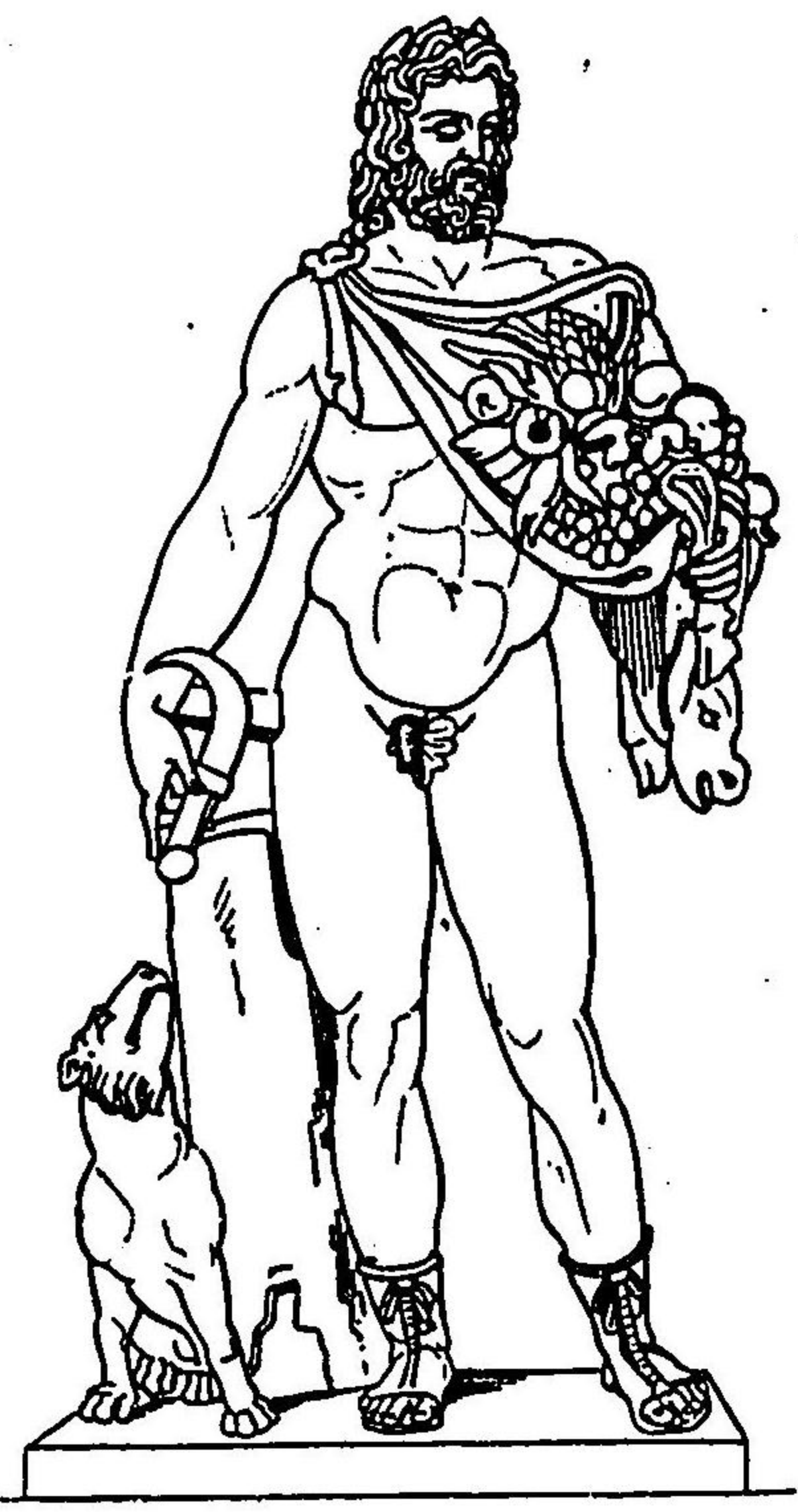
風響の醉ひて郊神 *Faunus* 等に扶けら  
 る、圖あり。ナポリ聚珍館に藏する  
 ヘルクラニウムより得し壁畫には、  
 風響と山羊との角觝の圖三第圖百あり。  
 風響の持物は通例簫及牧羊者の曲

杖にして、時として松冠を看くることあり。

樹精 Silvanus

樹精は羅馬の樹神にして、極めて希臘の風響に肖たり。その名は樹Silvanusより出で、森林の神なることを示せり。人間に親しき慈神にして、樹木その他有らゆる植物及家畜の平安を保護す。されど又風響の如く時々寂寥の境に於いて旅人を欺き、又はこれを恐れしむること好みて、一面悪戯の神と現ず。その掌どる所、獨り樹林のみに限らず、又原野、花園及果樹園の豊饒乃至人間住居の安全を守護すること、宛も國境及土地の神たる境域Terrinusと酷似せり。こゝを以て果穀の初收は樹精に獻ぜらる。その神祠は羅馬の井ミナリスViminalis馬府七丘一及アエンチヌスの丘上に在りき。

詩人及造形藝術家は、共に百合及その他の花を夾雜したる粗朴の



像精樹 圖四百第

頭飾を着けしめ、一老夫として樹精を表出するを常とす。その持物は鎌なり。樹精の一古像四百に右手鎌を把り、左

手獸皮の衣に充たせる果物を持てるものあり。

郊神 Faunus

樹精に酷似せる羅馬の神に郊神あり。收穫の曾孫なりと云ふ。伊太利民俗最古の一神なり。山野、牧場及田園を守護し、又牧羊を繁殖せ

しめ、これを取り食ふ害獸を逐ふと信ぜられき。前者の性格よりして一に沃神 *Ianus* と呼ばれ、後者の性格よりして又防狼 *Lupus* と稱せらる。而して郊神は又希臘の風響の如く樹林に住し、時として旅客を畏し惱ませるもの、如し。又夜陰に當りて人間の住家に入り、悪夢及妖現 *Incubus* もて人を悩ますと云ふ。その懸識の靈能を有するこども亦風響に同じく、現に神意を默示し、或は夢中に於いて神答を告ぐ。郊神はこの性格に由りて魯神 *Faunus* と異名せられ、アルブネヤ *Albunea, Latium* の溪上チブル *Fibur* の市の小林に於いて有名なる託宣ありき。郊神の信仰は頗る高くして、種々の祭典はこれが爲に舉行せられ、羝羊の贄を獻じ、又灌酒、灌乳の儀を行へり。郊神祭 *Faunalia* は十二月五日 *Nonas, Idus* にして、祭筵の客はその歡樂を制せらるゝことなく、奴隷も亦諸々の自由を許されき。又防狼祭 *Lupercalia* あり。これを郊神の本祭とす。この祭節は毎年二月十五日に行はれ、舊俗を守れる諸々の古儀の行はるゝを以て殊に著名なりき。その古儀の主なるものは、防狼の仕祝 *Luperci* の行事にして、仕祝は神供を了へたる後、身には屠りたる犠牲の羶き獸皮の垂巾のみを着け、バラチウムの防狼廟より出で、羅馬の諸街を走り、人に逢へば則ちその携ふる所の血痕淋漓たる獸皮條を以てこれを打つ。石女はこれに打たるれば必ず孕みて、不妊の辱を免るゝことを得べしと信ぜられ、この仕祝の通路に出で、敢へて打たるゝことを願へり。この日を贖罪の日として淨日 *Dies februatus* と呼ぶ。この月の名淨月 *Februarius* はこれより出でたり。羅馬人は又希臘の風響の風響族に於けるが如く、一の郊神を崇めしに止まらずして、忽ち郊神族の一群を想像し出し、詩家及畫家、彫塑家は、やがて全くこれを風響乃至風響族と同視し、又往々希

臘の羊脚人フエリと混淆せり。故にその藝術に表現せられたる形相も、亦殆ど全く風響バネウス乃至風響族バネウスと相同じとす。

郊神フエリの妻にはあらねど、別に女性の郊神フエリあり。これを郊女フエリ *Fauna* と云ふ。又田野の慈神なり。希臘の雲ネベス貫ペニと同視せられ、良女ボナデア *Bona Dea* と稱せらる。羅馬には毎年この神の夜祭あり。神供を獻ずるに深夜を以てし、男子のこれに與ることを嚴禁せりき。



圖五百第  
像神郊の館珍翠國英



像神郊のンヘンユミ 圖六百第

郊神フエリを寫したる藝術上遺品又少からず。皆風響フエリの像と相同じくして、互に混稱せり。英國聚珍館には笑へる郊神フエリの像あり。右手に簫を

把り、左手に曲杖を持ち、肩より斜に獸皮を纏へり。又同館に一裸像の右手に盃を把り、左手に瓶を持てるあり。これと稍異なりて、獸皮を纏へること前の笑像の如く、手に棍棒を握れる銅像第五百あるを見る。同館の陶製浮彫には、郊神族の葡萄を採る圖、及これを運ぶ圖あり。以て古代藝術家のこの神の表出に關する理想を知るに足れり。この餘ミューンヘン彫塑館のバルベリニイ家の郊神、第六百ナボリの睡眠、舞踊等諸像、及羅馬ラテランの舞像等、遺品頗る多し。

圃神  
Ilkano.  
Priapus.

圃神は古の文士の曾てこれを記したる者なきを以て見るに、その信仰は永くヘルレスポント海峽の地方に限られしものなるべし。主として崇拜せられたるは、北西小亞細亞ミューシャのラムプサコ

ス市 *Lampscos* とす。酒聖と染女との子にして、自然界の増盛豊饒を掌どり、殊に染愛の効果たる生殖の象徴たり。故に又往々堅勢の形相に表せられ、花園及葡萄圃等には猥褻なる像を建てき。圃神は又家畜家禽を繁殖せしめ、更に漁獵及養蜂を保護する神たり。驢を以てこの神の犠牲に獻ずるを常とするよりして、圃神の驢に對する敵意の滑稽なる話説少からず。圃神は又花園、田野の初收並びに牛乳、蜂蜜の飲供を享く。この神の歸依は染女の崇拜と共に以太利に傳へられ、終に以太利固有の神ムツヌス *Mutunus* と同視せられたり。この神は高等藝術の製作に上れること稀なり。以太利に於いては、使神標に同じき木製粗彫の柱像を花園に建つるを常とせり。圃神の持物は末太き楯と鎌となり。

收獲 *Saturus* 及 穡女 *Ops*

收獲と穡女とは、共に以太利の太古より民俗の崇拜せし神にして、  
收獲は農業を教へ、殊に葡萄その他諸果樹の栽植を人間に傳へた  
りと信ぜらるゝのみならず、又人間をして開明の域に進ましめ、文  
化の祥福を享受せしめたる大恩神と尊ばれき。後羅馬人の希臘の  
諸神傳に化せられてより、終に時間と同視するに至れり。こゝを以  
て、時間のその子天父に倒さるゝや、逃れて以太利に來り、肇父の爲  
に迎受せられたりこの話説は起りぬ。時間はこの時無定住の民を  
伴ひ來り、正格なる政治上團體に結合して、みづからこれを治めき  
と云ふ。これ即ち人間の未だ悲愁困乏に苦むこゝあらざりし黄金  
時代なりしなり。これを羅馬の收獲の由來とす。こゝを以て羅馬の

民はこの幸福なりし時世の記念として、毎年十二月十七日より十  
九日に至る三日間、收獲節 *Saturnalia* を舉行す。後この祭節はその義變  
じて天主教の齋會 *Carnival* と爲り、今に至るも尙その遺風を存ず。收獲  
節の時に當りては、毫も拘束せらるゝこゝなき歡喜の樂事羅馬全  
市に行はれ、泥酔亂舞、諧謔嬉戯を極むるを常とす。族階の差特は全  
く撤せられ、學校、官署は皆業を休み、商賈は盡くその店を閉づ。最終  
の十九日は最も重き祭日にして、特に奴隸の爲に設けらる。一年の  
中この一日のみは、羅馬の社會に全く奴隸と云ふ者なきなり。平生  
の仕務は一も課せらるゝこゝなく、自由にその主人の衣服を着け、  
主人の食卓に就きて、その欲する所の飲食を取ること許され、終  
日苦楚悲痛を忘るゝこゝを得。この日富者は家を開きて互に賓客  
優待の華奢を競へり。神には嚴格に犠牲を供したること言ふを待



たず。而してこの神の恩賚を與ふることなくして出で去らざらむが爲に、終年の間多く像足を封じたる紐は、この日も尙これを弛めず。神殿は夜を徹して燭火を點じ、演技場には勝負を舉行し、羅馬の諸祭節中最も盛大なるものなりき。

收穫の神廟の最も重きものは、羅馬の公場より、カピトリウムに上る斜坡に在りて、共和政治の初年に成り、タルクィニウス、シユベルブス王の創むる所なり。有らゆる幸福の頒賦者として、國帑の後見をこの神に委せしが故に、その神殿の下に國庫 *Openium* の窖ありき。

穡女は收穫の妃にして、收穫の時間と同化するに従ひて、又希臘の空間と同視せられき。稼期と穡期とを掌ざる豊穰の女神とす。故を以てその尊崇は密に收穫の歸依と相伴ひ、その祠は「カピトリウム」の收穫廟中に在り。祭典は八月二十五日に行はれ、新收の穀を打つを常とせり。

收穫と穡女とを俱にする時は、結婚及兒童の教育を掌どる神と爲る。これその果穀の發芽成熟の守護神たるよりして、次第に人間の生殖と長育とを併せ歸するに至れるなり。

收穫は常に老人として表出せられ、その手に鎌を把るを以て特徴とす。ホムベイの壁畫中の收穫の如し。



像獲收畫壁イペンホ 圖七百第

成熟 *Vertumnus* 及果女 *Pomona*

成熟マツルと果女ミカドメとは甚だ收穫ウケと穡女ウケメに肖たる以太利特有の神なり。たゞこの二神は、主として果樹果實をして災害を受けずして成熟せしむることを掌る。成熟マツルの名はもとみづから變化するを義とす。蓋し果實の開花の時より、その實のりその熟するに至るまでの種々の變化を示すものなり。この義よりして成熟マツルは自由にその身を變相する通力ありと信ぜらる。花の始めて開けるもの、果實の始めて熟せるものを以てこの神に供したり。果女ミカドメは又その名の如く果實の收穫期の女神にして、詩家はこれを成熟マツルの婦と爲す。頗る劣位の神なりと雖も、この二神には特にこれに仕ふる巫祝ありき。藝術に於いて成熟マツルは通例美少年として現され、その頭に穀物の穂

又は月桂の冠を着け、右手にその恩賚の標幟として充實せる兕觥を把れり。時として果實を盛りたる鉢、籃若くは鎌を以てその持物とす。果女ミカドメは通例美女に作られ、秋の季節を表する果樹の枝を把れり。

花女 *Flora*

田園の劣位諸神中、花を司ざる女神花女ハナメありて、サビニ入及以太利内地の到る處に頗る尊信せられき。又希臘の神傳に無き所とす。花女ハナメの歸依はヌマ王に依りて羅馬に致され、王は己の仕祝をこの女神に分てりと傳ふ。既にして又母儀の女神と爲りて更に高く尊崇せられ、女子は分娩の前にこの神に禱れり。その祭節は四月二十八日より五月一日に至るまでの間、盛なる歡樂もて舉行せらる。謂は

ゆる花女節 *Floralia* これなり。この時家は皆門戸を飾るに花を以てし、人は皆髪に着くるに花冠を以てす。カルタアゴ戦より後は、更にこれに加ふるに勝負を以てし、又兎鹿を演技場に狩り、益々盛大なるここを致せり。

藝術家は花冠を着けたる美少女としてこれを表出せり。ナポリ聚珍館に存するファルネエ家の等身より大なる花女の大理石像



像女花の館珍聚リボナ 圖八百第

八百は、極めて著名の佳作とす。千七百九十年頃、羅馬のファルネエ家の宮殿よりナポリに遷され

ものなり。右手に裾端を執り、左手に一束の花を持てり。

### 牧女 *Pales*

牧女は伊太利民族古代牧人の女神にして、亦希臘に無き所なり。パラチウム丘の名は、もとたゞ牧畜民族の義にして、この神の名より來れるなり。牧女は畜群の繁殖と健康とを掌どり、特に牧羊者の爲に尊崇せられき。その祭節は即ち羅馬市開創の例年記念祭にして、牧女の爲に行はれ、古代朴野の習俗を守れり。謂はゆる牧女節 *Pallia* これなり。祭儀の古俗中最も著きものは、大いなる藁火を燃し、牧羊者の畜群を率ゐてその中を突過することなりき。牧羊者はこれを以てその罪障を淨むることを得ると信ぜり。牛乳、菓子及炙りたる稷を牧女に供す。現存の神像一も有ることなし。

境域 Terminus

境域は稼穡の安全又は畜群の繁殖を護ることなしと雖も、尙田野の諸神中に數へらる。これその地境を掌どる神なればなり。亦以太利特有の神祇とす。地境標は總べてこの神の爲に神聖にして、皆宗教上の觀念を以てこれを重視せり。傳説に依るに、又マ王は民をして深く地境の神聖なることを尊重せしめむと欲して、この神の爲に特に祭節を制定し、境域祭 Terminalia と稱して、毎年二月二十三日に舉行せしめき。この時相隣接せる土地の所有者は、花冠を以て境界の標石に冠し、又扁たき菓子をこの神に捧ぐるを俗とせり。境域の掌どる所は、常に田野邸宅の境界のみに局せず。神性の意義は一層廣大なるものありて、國境も亦この神の守護する所なりと

信ぜられしより、カピトリウムカピトリウムの武女廟中に、特にこの神の一禮殿ありて、その像は「カピトリウム」天父廟の中央に立てり。傳へ云ふ。タルク<sup>#</sup>ニウス王朝の後、カピトリウムカピトリウムに天父の大宮殿建築の設計を企てたるに當り、丘上の地は限りありて、既に存する所の種々の神祠を移さざるべからず。然れどもこれを移すには、諸神の應諾を得て始めて行ふべきものなりき。こゝに於いて現在神祠の諸神は、皆最勝の天神の爲に速かに境を譲り、各々示兆の法を以てその神意を發露せり。獨り境域は固く執りて遷座を諾する意を示さず。故にその祠は已むことを得ずして、終に天父殿中に含まるゝに至れるなりとぞ。

境域の像は希臘の使神標と酷似せり。復藝術に要用なるものに非ず。